東海道名所圖會

内閣文庫
和書
八六六四
六
毛二函
二一架
冊號類

内閣文庫
番號 和 8664
冊數 6（ 1 ）
函號 172 271

172-271

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

中山前大納言愛親卿

権法室主人

凡例

一東海道ハ京師よりたゞ先ヲ江戸ニ到ル都て十州ニ亘て其驛路を標せし名所古跡神社佛院を圖會と次驛を圓圍ニ於ケて題し行程ハ其下ニ署ス

一海道ハ神社を延喜式神名帳ニ載るを選んで記し郷里ニ於ケ生土神あり多くハ勸請の神祠なれど是を除く然れども大度ニ到ッてハ攝んで載る寺院も亦あれ准し古刹を擇んで記し末派の墳寺道場の類を除退あらざれども又省く大略畿内名所圖會ハ例ニ倣ふ

一東海道より五里七里入るの地も亦名神名刹ハ其ニ於ケ擧る所謂尾州津嶌天王三州風朱寺遠刀秋葉山相州大山寺江嶋鎌倉等なり餘ハ其ニ准ず

一渾て方位を示すハ前位ニ循ふ其の東何里某の西何町ニ

御序 一ノ四

あらと證し或ハ左の方右の方とハ京師より東関ニ赴く旅者の左右なり

一引書ハ古來流布の紀行和歌ハ代々の撰集詩賦ハ名家の文集ニ引據とし軍談ハ其要を撮んで記し神廟梵刹の由緣を社人寺僧の記せるを勘へ又村翁野夫の語も是なるハ載る事あり

一世ニ鴨長明道之記同海道記といふ二書あり予是を校ふ事ハ長明ハ承元五年十月十三日鎌倉ニ下向し將軍實朝公ニ謁し法華堂ニ於て懷舊の和歌を詠し事東鑑ニ見ゆ厥后八年を歷て建保四年六月八日春秋六十四歳にして卒す此事方丈記訓説ニ詳に録せり初の長明道之記ニ仁治三年八月十日京を出るとあり長明示寂の後廿六年を歷たり忘しくあれハ多田滿仲五代孫從五位下伊賀守源光行の紀行ハ和歌ハ夫木集ニ入ッて光行と記せり柱葉拾葉ニハ此書を源親行と署次親行ハ光行の長子なるゝ是因之此巻中ニハまとゞく

光り紀りと記しく長明と記さば又海道記は貞應二年卯月上旬花洛を出立と書るとあれも長明入寂の後七年を歴之此訳鎌倉志にも和歌は長明にしく詞は後人の贅する所なるべしと書るは真に辞の風體黒白にしく長明にあらざる事明らかなり長明は無名抄方丈記の二書より外なし又兼好の徒しく艸に長明四季物語は引いて其頃の書は亡びたるべしと今世にある四季物語の二書は後人の准へ作せる偽書なり

一 いにしへより古人の紀り名地の圖画道中記の類殆多し然れども海道源古今改ゆるに舊書をみるに惑ふ事多し予巡りして今時の見聞に記に猶脱漏は後人の補遺に俟のみ

一 画圖は京師江戸及び諸邦此寄合書之故に画毎に姓名下章あり細圖は浪速竹原春泉齊の一筆によりて姓名に記さず

東海道名所圖會卷之一

目録

平安城　洛東風景　三條橋　粟田
日罡　山科　四宮河原　小関越
追分　相阪山　走井　逢坂関
山近両國堺　稱丸祠　関寺小町趾　山神森
関清水　関明神祠　関小川　手向山
安養寺 蓮如名駒石　世喜寺　顕證寺　大津
大津宮　練貫水　刃檀道　長等山
三井寺　新羅明神　三尾明神　護法善神　新宮権現　熊野権現
金堂　御井　梵鐘　食堂　大鍋
唐院　護摩堂　三層塔　新山王　寶蔵　十八神
辨天祠　任吉祠　燈幢石壇　經蔵　教待仙人入定窟
圓滿院御殿　安樂行堂　正法寺　福神石　大悲閣　近松寺
八祠樓　安然石塔　尾藏寺　合尾八幡　微妙寺　水観寺
常在寺　早尾祠　亀丘　亀鳴橋　村雲橋　夜櫻
淨明水　二王門　三井十景　北院　中院　南院

智證大師傳 贈大友皇子傳
滋賀花園
志賀津
梵釋廢寺
唐崎一ツ松
猿屋
咩字門
聖女祠 竈殿
氣比祠
八王子宮 拂社
神祖御宮 瀬佛堂 金鼓堂
眞葛原
興成宮
石占井
妙見祠

同御影銘
志賀山城
黒主祠
明智光秀城趾
日吉山王神社大宮
二ノ宮 攝社 三十六人 能士圖
客人宮 影向石 拂社
三宮 金岩
四屋若宮
磯成宮
同ク祠
大將軍祠

志賀都
滋賀浦
貫之祠
唐崎
植武大皇御塔 春日祠 竹臺
龜井
十禪師宮 攝社 船石
中七社
植武大皇御廟
南若宮
比叡辻
大鳥井
百枝祠

志賀里
滋賀大輪田
崇福廢寺
辛崎神祠 山王系 神供
波止土濃 濯眼水 竈殿
聖眞子宮 本地堂 橘樹
夢妙幢石 明星水
下七社
慈眼大師廟
登町若宮二社
若宮
生源寺
小五月會岡

壹之

歡喜石
鼠祠
走井大師堂
八柳
輕子宮
西教寺
浮御堂
比良
菊濱 玉造
芭蕉堂 龍ヶ岡
丈艸塚
粟津野
兼平墳

和產和行塚
彼岸石
走井宮
滋賀院
山王系圖
朱迎寺
勾當内侍古蹟
打出濱
大嘗會稲穗貢
膳所 吾孫君祠 陽光清水
粟津社

大政所 宿院
地藏堂
猿塚
榊宮
比叡山
苗麻神社
大伴櫻
四宮社
松本渡口
膳石城 膳所町
粟津里

王子宮 靈石
早尾社
塔下惣社
神路山
四明嶽 冨士山遠景
堅田浦
眞聖入江
精大明神祠
義仲寺 義仲墳 芭蕉翁塚
陪膳濱
粟津松原

雖練石補天鼇足立極清濁共化成浩劫浩劫
之外環九德大洲浩劫之中生一大桑木延漫
數百里所稱奮鬯風土記適是也此墟曠茫而
無疆今直關以東到京坼數百里而有魁者有
奇者有淡者有秀者所稱籬島子圖繪迺是也
當與縮几荒於赤蹄閒纍囚睫之中者詒覺不
當與躭金玉狗馬玩好而趨勢利者俱焉云

箕山　熊谷尚之識

小朝拝

国立公文書館
National Archives of Japan

月清
拾芥抄云
兼明門
紫宸殿の
南面門
拾葉集記云
應和元年小野道風
殿上にて兼明門の
額を書く

草薙御劔と申奉りし初の御名ハ天叢雲劔と申ス 倭姫世記曰ハ倭琉曲玉。
八咫鏡草薙劔之三種神寶ハ代々皇孫ニ授給ひ永く大璽と定り
日本書紀曰 素盞烏尊出雲國簸川上ニ天降まし給ひ時ニ稲田姫
ハ老たる夫婦の者ありて其中ニ老人の少女ニ至て撫く悲しむ
素盞烏尊向まして汝等ハ誰ぞと問給ひ其ハ此
所の國神ニて脚摩乳妻ハ手摩乳と申ス此老女ハ吾兒ニて名ハ
奇稲田姫と申ス此ニ中ニハ岐大蛇ありて往ニ吾兒を呑て今又まん人
ニ成ぬ脱免ニ術ハ一ツ無ス故ニ嘆ニ依ニ悲ム
ニ哉ニ女を我妻ニ得させんや
素盞烏尊も倶ニ歎給ひ汝等の大蛇を殺ス
老人大ニ喜び勅ニ随ひ奉ん尊素盞烏尊稲田姫の湯ハの仇討ん
御髪ニ挿ませ婦人の槽ニ酒を盛て待ル果ハまこと山の震動して大蛇
現れ出ル首尾八岐ありて眼ハ酸醤の如し背ニ松柏生茂て八丘八谷の間ニ蔓
延く頭を上ケ八槽の酒を飲干酔伏して眠る其時素盞烏所帯の十握
劔ニ抜て大蛇をずた〳〵ニ斬ル尾ニ至て劔の刃一ツ缺ル則其尾ニ裂て視
ル八ツの劔ありて大蛇の所居る上ニ常ニ村雲覆ひしを天叢雲劔と號ケ
真ニ此寶劔人代ニ傳ル神日本磐余彦天皇 神武 帝 神代の蹤を継日向國
宮崎ニ都ニ居ル此時天下草昧ニして民ハ穴ニ住ケリ帝東ニ大和國橿原宮ニ遷幸ましまし給ひ
四海を治め初ル帝承ケ大和國橿原宮ニ遷幸ましまし給ひ
忍代別天皇 景行 二十八年春二月朔日皇子日本武尊筑紫の叛賊熊襲ハ
一舉ニ滅し其國ニ於て九州悉ニ治る百姓ニ業を施ス同帝紀四十年
夏六月東夷叛逆のよし ニ依て 天皇斧鉞を持ク日本武尊ニ授け東國
安寧ニ平ケ定ル帝詔ありて曰朕聞東夷ハ識性暴強ニして凌犯ニ寇ニ
邪神ありて郊ニ妖鬼ありて街衢ニ遮ル人を殺し其賊徒の中ニ蝦夷
尤強し男女ニ雑て父子の別ニ冬ハ穴ニ宿を夏ハ櫓ニ棲毛衣を着て血ニ飲で
昆弟相疑ひ山ニ登事飛禽の如く郊ニ行事走獣の如し射ニ草ニ隠ル追ハ
ニ入ル人民を略ル古より已来いまだ王化ニ染ニ従ニ今朕汝等ニ代ニ身體

長大ふりく容姿端正之力ハ枕詞を柱る梓弓を半雷の如一向ニ所敢なく攻所必勝ちとの〳〵事かし則和之體ハ吾子みりく實ハ神人ともに寔ニ天賦不穀と慈ぐ國の不平ハ祥禍くく天業と経綸宗廟を不易あくんの命ありん是天下の則陰ぐ天下ニ朕ぐ位ハ則陰ぐ位ニ願ハ謀ハ深くく遠を慮くく暴賊姦鬼ハ攘退へしと詔ありりんしハ日本武尊爺孰を授て再祥して奏くく曰嘗て西戎を征るの年天威を施しへ恭然龍衰を翳を其後決辰も経ぐくく東夷暴逆次速ニ天神地祇を祀を天皇の聖恩ハ蒙りりく其境ニ臨ト教を示ニふ猶服せざるをのめぐんだ忽兵ハ發くてこれを誅罰へ四海ハ謐ト叡慮を慰をん天皇弟吉備武彦。大伴武日連ハ日本武尊ニ従くり七掬脛ハ脇まとくく冬十月朔日威風凛々くくく出陣へまだ枉道て伊勢皇太神宮ハ再祥しへ倭姫命ニ辞して曰ハく詔を被て東征へ反賊を誅んと欲次ニ於是倭姫命寶劔を授く愼ぐ怠ること令ハ治ハ日本武尊ニ至る其地の姦賊陽従ひ尊を欺て曰

山邨ニ麋鹿あり氣を害霧のやく足ハ茂林のやうあふ臨んく將ハ少と奏次尊其言を信ハ曠野ニ入ハく悠々然として覓獣へやハ姦賊思ハ圖ニ將ハく相圓の根煙を上ゲんを伏勢一度ニ起ハく其火ニ放ハへ夫兵ハ驚ニふせんとハ尊驚破謀をあと知りく佩せ給ハ蕞雲の寶劔をとりて草ニ薙ひうたちまちへ風忽然ハくく起ハ焼ハ来ハ尊ニ吹靡ニ猛火熾ニふやれば賊兵途ハ衷ひ炬ニふくく強へく炎四方ニ滿々なれば逆賊強へくぞ討ニふかう於是草薙神劔と改ハ其火ニ焼滅とハく尊直ニ進んぐ相模國を就上総ニ至ハ艇へて海上を渡らせハへ暴風忽起ハて王船を覆ハんとハ尊の從ハへ愛妾橘媛宣ハへ風ハハ海神の所為ニ願ハ妾尊ニ贖ハく海ニ入尊の御身を穩かくせんと言訖て瀬の巡ニ入ハ尊暴風忽止んく王船ハ着岸へやハへ故ニ時の人其海ハ駄水とハへ尊ハ上総より陸奥ニ入ハく蝦夫の不信を悉平げやへ凱陣の時碓日嶺ニ至ハく東方を臨やひ三歎ハく吾嬬者ハくと宣ハ於是関の名ハ吾嬬と呼ハ風俗ハハ縦く

都のあんぐし祇園ワラの
表のやうに美頂の初花
咲をむかひにより地主の桜は
雲と見へ雪とちるまで
貴様の旅ひ秀山の酣歌
蹴踘の業は者雙林乃
能囃子女伶の會下汀
京の生花競揚弓の者
二彩茶屋の豆腐切る
者これみな祇園の御祚
とてでしひ御祚楽の
飾りなるべし
京の水の清さまて
洗ひみがた
美顔と粧ひ
美服と浪とひ
月花にうか
ほしも名物の

一種なるべし
水至って
清ひ時は
魚を取に
東方先生
喟然として
のたまひしは
たひなる
愛言なりに

夫名劍の德は釋名曰劍は檢なり非常を防檢するの所以之管子は按ずるに
むかし葛天盧の山を發て金は出ず蚩尤されを得て劍を製ず名は劍鎧と
いへ是劍の始之周官の桃氏劍を作る厥后楚に龍泉あり秦に太阿工市あり呉に
干將鏌耶あり越に純鈞湛盧豪曹魚腸巨闕の諸劍あり漢に高祖の斬虵
あり三尺を提て天下を取る魏に文帝の飛景流彩華鋒の三劍ありしまて
天下の名器之我朝にも小鳥膝丸髭切鯰珠切小狐等あり和漢名劍を賞
ドて天下を治る事古今にゆしき例なるべし
古今物名　さうりこけ
花の色はうつひとさうりこかれとも此へ是くそ落はそめけり　たなむこ此しまは
桓武天皇平安城を興基ありしより結繩の政をして天下を化成し加之代々の
聖主德は踏仁を詠じ上古の風は同うしてく群生を撫育し給へば四海靜
にして億兆の歳を彌らんとぞ見へ給る光廣卿曙の記云延喜の御事は
又ねた例にも申めれどぞれもたしぐは匈奴殘りたるよし古れ多にも見へ
たり今関のむかし戸ざしはなれて天が下卓錐の地までをさやかなりけと

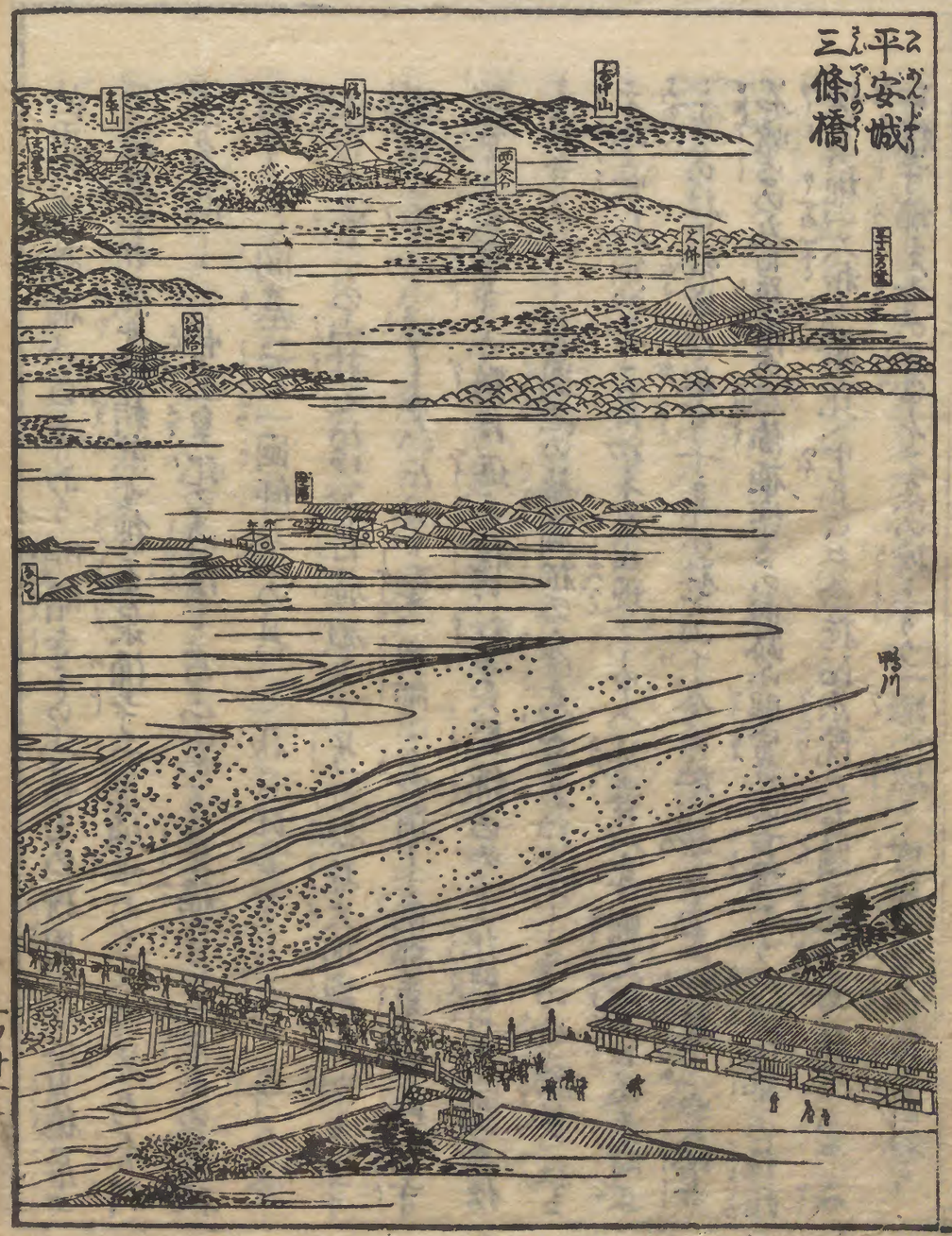
いへ事ありし蔡邕獨斷曰京師は天子の畿内千里日月を象る日月の躔次千里
なり毛詩曰文王都を豊に造る穫秦云燕の地方二千里帶甲數十萬これは天府
國といへ左思が都賦に金城の萬雉を建三條の廣路は披き十二の通門は立てり
抑平安京は都て一千有餘歳の都にて中華にも其例あらず畿内七道は
天武帝の御時勅によりて定られ其中にも東海道ぞの冠首たり單薙の銀光
煌々として四海の潮は東日に照されて浪の者謐之干戈の威日々に新にして
魚鳥敢て翔らず賞罰嚴にして虎畏まれば江府までの往來貴賤と
かく老少とおく者とかく晝とかく公卿は勅を蒙りて其の御使藩屏乃
諸侯は此はなく參勤ありあるは志人の交易斗藪の桑門風騷の歌枕誹諧の
引御伊勢はいと富士詣まで驛路の鈴は絶るもかく馬あり牛輿あり舟あり
橋あり泊くは自在にして酒旗所くに翩翻たり周禮曰國野の道十里に
一廬あり廬に飲食あり三十里に宿あり宿に驛亭ありとぞ馬に鈴をはこ馬を
驛路の鈴といふむかし毎年貢を馬にて運び藏をる時又は公卿國々乃任

あらて守護ふかきゆゑ時は鈴を付る馬にあれも関の戸を昼夜通しけるとぞ
日本紀孝徳帝の御宇大化二年小関宿を定め駅馬伝馬小鈴の契符を付る事
あるは續日本紀及び延喜式江家次第等ふも粗見へたり
勅使館
旅人の山語へつる夕旁ふ
日 道細き里の駅は鈴森ふりそくるなり 宮内省
神もさそふりくる雨を志の塚は駅の松は小萩原と聲 道遥院
関王七鈴とりく七道へつゝ
毎ふりつゝして宿りし其所を驛ふ洛陽教業坊二條橋ふ東海道の喉口ふくり往もあれより貢路は
橋上より洛東の風景ふ見渡せる本間く神社佛閣烈しく若洛の勝景ふ
やぐら橋下の流ふ水上ふ鴨皇太神宮御ふりふり鴨川とふ名産ふ硯石水
乾ぐして墨を ふ艶あり又月の比ふ日々ふ雛を漢く調貢しをる至て美味之
艮ふ台嶺巍然そゝく王城の鬼門を護ふ悪魔ふ擯ふ赤山禅若社

一乗寺の際ふ松石川土山の詩仙堂白川の瀧如意嶽清土寺ふの大文字
月待ふの禁ふ銀閣寺あり神楽岡吉田社ふ神祇官社齊場ふくく
日本の神ふ祇鎮ふる真南ふ向ふ真如堂黒谷西ふ百万遍東ふ永観堂ある鹿谷
談合谷松虫鈴虫の古墳光雲寺若王寺五山之上の南禅寺山腹ふる
駒ふの瀧山嶺を獨秀峯とりて二條橋上より南を眺望ふ頂山知恩教院
吉山の山亭ふる四時花くび蹴鞠の砦ふ糸竹の妓會ふ院そふく遊
興ふ促次長楽寺東大谷雙林寺の西り居大雅ふ跡祇園女御の祠蹟
祇園社二軒茶屋赤蔽膝祓ふそゝく豆腐切る若丁ふそゝり下ふ原の酧歌
の聲祇園町の待宵雲の髻ばく花の顔落ふの帰り花ふ寄句ふ筒井筒
いづくも共ふ杜あらん紅葉のふ名ふ小町紅洗風まゝくふ
うかれそふ名ふ梅ふよくそんゝくふ
夕涼蝉の羽重ふ深帷子ふ名ふ肌をうれや一力見のふんゆふ顕顕組芝居ふ早雲
花矢倉縄ふふ雨止北藏尊建仁寺ふ陀羅尼ふ陸六波羅蜜寺向ひ鉾

六道能化の南無地藏安井の金比羅蛙が池菊溪菊水平王祠寺は桂乃
そし桂七觀音は伽羅の像八坂の庚申八坂の塔高基寺の姥櫻幽艷と分萩
の花靈山の樓閣より洛陽の萬戸鮮之為部山西大谷三寧坂經書堂
仲光寺子安の觀音車舍馬止光出れより清水寺に至る地主の櫻者羽
の瀧東の水京清が瓜形南の方は弁中山清閑寺といふ九重の丹楓要石
豊國山阿弥陀峯継信忠信の石塔三鳩社東は小松谷といふ法然上人
旧蹟の深刹あり是より苦集滅道渋谷とて山科るとて大津へ出る往還之
大佛殿は大正年中秀吉公の御建立にして盧舍那佛は安し樓門にて
二王の大像門には金色の高麗狗あり古豊國の社にありしと云又南手石
塔婆あり世俗秀吉公の古墳と云傳へ大鐘は南方回廊の外にあり二十三間
堂は蓮華王院といふ一千躰の觀音は安置堂前に狹泣水池の面の燕子花
濃紫の色麗しく此所の美觀之後堂にて大矢数あり諸侯の家臣にて
来て射術を様を東に妙法院法親王の御殿あり日吉社智積院普源院

池田町には梵論々々の寺あり明暗寺といふ其南の柳園は松永貞徳居士
の遺蹟之新熊野社新熊野觀音泉涌寺に泉涌水あり又佛牙乃舍利
世に名高し　帝王皇妃の御陵も當山にあり東福寺は藤原氏の菩提
所にして開基は聖一國師五山の其一之初は地名は月輪と號九條
関白兼實公の山莊之此ゆへに月輪殿下と号ひ嫡孫大相國光明峯寺
道家公禪法に帰しまひ此地を聖一國師に寄附し南都東大寺興福寺
を合て東福寺と號ひ通天橋の紅葉は蜀錦の如し兆殿司虎關の支僧
も此寺に住し思圓池の龍圓栢の庵木等名所多し三ツの峰稲荷社は
元明帝和銅四年二月初午日出現しまへ延喜八年贈大政大臣藤原時平
三峯の社を修造ひ永享十年に社を山下今の地に移ひ南に源草山寶塔寺
石峰寺の五百羅漢の石像極樂寺の旧跡に昭宣公の古墳あり元政法師の住所
伏見の桃山大和大路を北へ出ると五条橋の東院の古蹟籬ヶ嶌籬カ嶌支
本願寺佛光寺の甍すぐ二条の橋上より一眼に遮て寔平安京の佳景あり


平安城三條橋

東三條の森北方
世ゝ川とは寅の刻
おぶんより吾妻下り
江戸堂り伊勢
まつりの坂迄ひなど
日岡踏上の茶店に
集ひて酒莚を催
あるは餞別留別の
詩歌を送るも
多かりは
旅立やよい日の罡に
見送りて
まづ盃を
挿け上げ
由志よ

国立公文書館
National Archives of Japan

洛陽二條橋ヘ東海道ノ首ノ一ニ里ニ鴨川ヲ渡リテ向川橋アリ南ノ方ニ青蓮院
御門跡栗田御殿金戒寺ノ二猴堂本地藏栗田天皇ノ頂山ニ親鸞聖人
植髪ノ像アリ抑モ頂山ト号スルハ法華経玄義ニ靈鷲山ハ一名耆闍崛山
中華天台山ノ最高キ山時ニ絶ヘ去レルニ依テ山ノ頂ニ似タリトヤラン
ニ名ケシト将軍塚ハ高頂ノ高嶺ニアリ天下ニ災害アラン時ヲ鳴動ストイヘン
小鍛治宗近カ水ヲ汲ミ祭リシ稲荷山神明岩東岩倉大日山ノ土ニテ製シタル
陶器師アリ走井ハ栗田焼ト賞ス逢坂山ノ清水ハ井ノ九吾妻ニアリ今関
関原與市ト対ク勇威ヲ奮ヒ日岡峠ハ本会上人ヨク詠ヒ給ヒシ所ナリ
ヲ平ラケシノ人車ニ乗リ給ヒシ蹟ナリ延次焼ケ原千本松坂ハ二月堂
ノ阪路ヲ其ヨリ下ル所ノ廟堂アリ
一天智帝山野ニ御狩リシ時忽然
トシテ昇天アリシ御跡ノ落止ル所ニ陵ヲ建テリ御車馬ノ
人馬系図ヨリ下ル逢坂関ハ蝉丸ノ社ノ鎮座アリ拾玖抄ニ
アル山ニテ八ノ関ノ一ニシテ蝉丸ノ住ミ給ヒシ跡ナリ
十関ノ第一ニシテ蝉丸八角ノ石アリ天皇ノ御骨石トモ
或カ云天智帝ノ御陵ハ薩州鹿児島ニアリ

明王寺ハ蛭村ノ小ニアリ本尊十一面観音ハ慈覚大師ノ作之境内ニ鏡ノ池
アリ天智帝昇天ノ御玉體ヲ沈メシ川ヲ蛭村植髪村ト
ヨリ逢谷越アリ末社ノ條ニ出ル下街道ヲ通リ
ニ科郷トリ中ニ十六ヶ村アリ逢谷ヲ
トリ此ノ御堂ノ旧蹟逢初上人ノ
寺ノ旧跡栗栖野ノ田村将軍塚ノ宅村
ノ横東山寺逢谷小町寺等ハ山道
ヨリ来ル出岡路ニアリ
片岡世ニ清トヨク射術ノ達人ニ今
山ノ山ヲ左ヘ町ニアリ真言宗ニテ高野
大師ノ開基ナル毘沙門大王御寺ニ
アリ護国寺トリ末寺妙傳寺ニ属ス
今ハ荒ル又山伏諸葉ニヨリ高渡或柳ニ十禅寺ハ四宮村ニアリ
本尊聖観音ハ聖徳太子ノ作ニテ
訴ル山階宮ヨリ称次二代實録日山科宮品親王ヨリ
ノ人承親王ヨリ
逢谷越ヲ南ニ東西ニ貫ク
ノ横岩屋明神ノ宅ル山階
ノ石ノ内蔵助
ノ梅ノ寺阿弥陀堂ニ慶ル僧正遍昭
奴茶屋ハ山別ヨリ道ノ小側ニアリ此ニ祖ル
ニ末社ノ條ニ出ル下街道ヲ通リ
大仏殿ノ通リ
ニ苦集滅道トヨリ都ヘ
ノ山科毘沙門堂ハ大台宗ニテ傳教
大師ノ開基ナル毘沙門大王御寺ニ
アリ法親王住職ニテ右ニ法華ヲ
ノ檀林
ノ諸羽明神ノ御ニテ
ノ仁明帝皇四宮人承親王ノ棲ヒ
訴ル山階宮ヨリ称次二代實録日山科宮品親王ヨリ
ノ人承親王ヨリ
宮殿ノ風景

後小寺とし山禅師を開祖とし其より久しく荒廃せしを元和年中真慶
法師といふ人ここに住職し（此人異相の道人にして木の葉を衣とし又袈裟を着て素肉しくらしと云ふ）堂舎を
明正院上皇霊夢を感想しめし明暦元年に再営ありて二重の高閣を建
られ得月亭と号く則宸書の額あり上皇時々行幸ありて山水を愛し
閣前に短冊石を布く風雅よりなりたもふ石上に行幸しめしたまふ本尊阿弥陀
佛ハ後陽成院の勅作也竹が鼻地蔵寺ハ播州網干龍門寺の盤桂禅師中興し
めし本尊地蔵菩薩ハ弘法大師の作也四宮村廻地蔵ハ小堂也皇の作ふさくハ無しへる
林幡里に（今の六地蔵村といふ）ありしを平清盛西光法師に命ぜられ京師の廻六ヶ所に建られ
しを（毎年七月廿四日六地蔵めぐりとて都鄙群集す）四宮川袖をさへといひ木ありて古ハ市場あり

拾玉

あられ降りあれも世ハてるらや幸も惜しきのやはしなの袖をさへゆそ　慈鎮

小関越　四宮村ハ道明寺とも云ハ碑の名とあり此先側の堂径より入る或云道明寺あれハ道明寺
の北沢村道範の墓あり此人の名なるとぞ これより小関越より長等山
三井寺に至る中途に峠あり其東坂尾に山田堂といふあり石光山念仏堂と号し 三井寺に
属す本尊ハ方八尺余の自然石に阿弥陀仏廿五菩薩梵字等を鐫を智證大師の作といふ
其外大日如来役行者不動尊等なり京師清水氏霊夢によりて山上より掘得たり
○京師より追分まてハ都名所図会両巻に著したれバ是ハ大略を記すのみ

追分　村の名より次京師大坂への別れ道也札の辻に追分の標石あり（柳緑花紅の文字を鐫ぞ）
右の方ハ山科音羽村音羽川牛尾観音 白石明神 白石蓮 妙見祠 勧修寺 大亀
谷を越て石の表へ出る又小野より南へ行ば小野宮 随心院 小野小町化粧水
深草少将通ひ路 醍醐三寶院 上醍醐 巡礼観音 醍醐水 一言寺 日野薬師 鴨
長明方丈石 平重衡塔 明智光秀が亡所 小栗栖の荻 六地蔵 樋川 木幡里 黄檗
山萬福寺 宇治里 宇治橋 橋寺 恵心院 興正寺 三室 観音 朝日山 喜撰ケ嶽
亀石 浮嶋塔 平等院 扇の芝 釣殿 観音縣の森 茶師上林等の町家多く
大和街道 広野 新田へ出る 是より方々里余の大池といふあり 巨椋池 多し
狸の杜を渡る 追分より伏見へ三里 大坂へ十三里
伏見より旅共に船あり

相坂山　追分よりおうしの山なり 古歌多し

後撰
名にしおハゞ相坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな　三条右大臣

後拾
相坂の杉のむらたちひくほとハをふちにみゆる望月の駒　良暹法師

金葉
わたもこふ相坂山の郭公明日ハ聞へる声そ帰之　源定信

詞花
相阪の杉まの月のなかりせはいくきの駒といかて知まし　大蔵匡房

新古
鶯のなけともいまたふる雪に杉の葉白き逢坂の山　太上天皇

新後拾
湖うみやこより来にあふ坂の山もかすみてちる風そ吹　定家

続後拾
逢坂の山越えてかへりみれハ霞にほのく志賀の浦波　後京極摂政

走井は此
をうつ名水
の具一ゆして
炎暑の時ハ
旅行の方ど
個なり四時
清涼にして
涌出し潔冷
耳味なり

春泉齊

走井ふ
ゆくとの
涌や
ちり紅葉
洞夕

走井

逢阪山
関与小町

下河邊維恵写

逢坂山
関明神
稱九祠

国立公文書館
National Archives of Japan

蟬丸

木應受

蟬翁妙曲起騷風
散入黃鐘六律通
莫管聲明今古說
琵琶湖上解絃中

秋籬嶌

国立公文書館
National Archives of Japan

走井　逢坂大谷町茶店の名物なり後の人家　拾遺
走井のほとりをゆくやあふ坂の関もる人のかけの駒　信実元輔
逢坂のかけ樋の水ふかゆくもの恋ひのこの葉ちる月の駒　東国
走井のかけ樋の雪にたかひけるのやうなるを月の駒　仝
百茶堂　走井お我の上の山ふもとの額ふ百茶堂の右ふあり石垣の茶師となれり　百茶堂　関西並京茶師
小町百茶の像ふ安政度像をうつしかへ
姚黄堂　旧跡ふ逢坂山と号す
逢坂関　文徳天皇天安元年初めて逢坂関と建る関守十二人ふ寺ふより及び僧兵二十人ふ兵具厳重ふ鎗く金剛杖士ふ持せ番ふ昼夜怠る事なく関門ふ太鼓ふ時を知らせ又怠る者ふ鐘ふ打て知らせ関守ふ怠慢の眼を張く双び据ふ
旧記ふ見えたり　関守十二人ふ寺ふより及び僧兵二十人ふ兵具厳重ふ鎗く金剛杖士ふ持せ番ふ昼夜怠る事なく関門ふ太鼓ふ時を知らせ関守ふ怠慢の眼を張く双び据ふ
源氏ふ探丸ふ住ひ　正徳年中寺門と詳論に及びし山家より勅使下向ありて和睦ふ成れり
随士　山階坂ふ
氏ふ探丸ふ住ひ　正徳年中寺門と詳論に及びし山家より勅使下向ありて和睦ふ成れり
小倉山の歌として　逢坂山の関は　後藤祀元永禄八年八月十八日江関屋敷
新関　逢坂ふ東ふとふ守りの関ふ在原元方
逢坂の東ふとふ守りの関ふ在原元方

新勅　相坂の関ふをゆふしでかけちらす人の渡まてとめよれ出羽乃白法
続古　逢ふ坂ふるみち中ふ杜あまた逢さ坂ふとふのせき　定家
続拾　逢坂の関の杜むら秀ありて立ちかくしけふ駒のつなかれ　公雄門人
新後撰　逢坂の関ふ杜むら秀ありて立ちかくしけふ駒のつなかれ　源清泉
続古　逢坂を越えて果ぬ秋風ふ千束こそをおり人白川乃をき　信部源信
新後拾　初そくや誰初るあふ坂ふ関や藤原ふ始おるらん　平政時朝臣
ほう梅町ふ住ふ松屋久兵衛ふ方ふ逢坂の名たふ木の子ふ焼てこれふ名ふ付て売ふ
逢坂の関ふ杜むら秀ありて立ちかくしけふ駒のつなかれ　待賢門院堀川
逢坂を越えて果ぬ秋風ふ千束こそをおり人白川乃をき　伊勢
逢坂を越えて果ぬ秋風ふ千束こそをおり人白川乃をき　後蓮法師
新後撰　初そくや誰初るあふ坂ふ関や藤原ふ始おるらん　平政時朝臣
ほう梅町ふ住ふ松屋久兵衛ふ方ふ逢坂の名たふ木の子ふ焼てこれふ名ふ付て売ふ
逢坂の関ふ杜むら秀ありて立ちかくしけふ駒のつなかれ　待賢門院堀川
逢坂を越えて果ぬ秋風ふ千束こそをおり人白川乃をき　伊勢
逢坂を越えて果ぬ秋風ふ千束こそをおり人白川乃をき　後蓮法師

車おほくかきやへるにとめぞでし浪世のうけて衣にく待るるをはこまへ中う

さりこそのみやこさきこえけれ。ちくゑのぼりはるかの山をこころへかへらくきえんさき

ひろたく。言子のむかへりつぶに直りといてあゆさけせなめるめりとあれば

衣ところくきのそろくねへそうるとも世にあゆさけせなへゆるさじ

心せしこえせきのゆるかつときこゆ。ちせへ

わさりへ人をえやとえ関あれば思もかうしどあけてすがたとの

とありし文どもをもしめのへ僧都のききれぬうをきへ侍えてとうのちひくき。

のちへ乃へ侍おへ母くぞそあふさいかうとそよみへされくそしもせず成に

るぞとつかしとまとめ世のよ

山近両國堺

昔しは逢坂山の峠なりし也今に両国寺とて津刹あり当時は山城近江の堺とす此山きの名也又大津絵又は算盤鍛冶は算盤を作る人の名也又は土佐又平といふ者はじめて書出す又築盤一里塚なども有池の側にある也此所の名池の側世に名高し原氏は細工人の家をなし六条に大きなる池あり其側にある池の側の井とて一条本願寺建立の時公命によりて井を作らしむ逢坂山の麓に名池を賜ふ今も此の池の側とて名高し

蝉丸明神祠

逢坂上大谷町左側にあり蝉丸霊を祭る 蝉丸の年次に見えたり 御祭五月廿二日

関寺小町蹟

相坂庁原町阿弥陀堂なりて又清水町の山の手に世喜寺といふあり又見ゆる小町が家へ清水町妙光寺といへる寺にありしとも由縁定かならず

家集

日ぐらしのなく山里の夕ぐれは風よりほかにとふ人もなし

同

百くさの花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとがめそ

同

あはれなりかなき世の中にあひはれの日まてかけのん

壮裏記

三皇五帝の妃も漢王周公の妻もいまだ此驕をなさず衣には錦繍をかさね口には海陸の珍味をそなへ身には蘭麝をかをらし和哥の道にたくみ才の男なく賎くの思ひそめし女御更衣に心をかけざるなし然に十七にて母をうしなひ十九にて父にをくれ廿一にて兄に別れ廿三にて弟をうしなふそれしかも単孤無縁の独り人と成てたのむかたなかりしかばみどりのかつらも日毎に衰へやうやう顔年くふをそ重つ。あはれなるかな花の遊びはまどろむほどなくいつしか宿をもとめ住くのとをうしなひ紅は破れて蓬生のうちに衣をかさねてふしたるにそれぞ月の空しくさえ。雁はあれて

古今

文屋康秀参河の掾になりてあがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる

わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ 小町

と旅く次ぎふしたちこれ沙くほふ果ふをそくる。人間のあつさ
おれみく和の巻ー

清輔袋草紙云 小野小町之事見王造云文書生涯并裏其姓王造
氏也小野若住所之名歟或人云件并裏記者弘法大師所
作云小町者貞観之人也
彼王造壮裏記無名抄云
紫式部和泉の枕ふんそをたふことよ全くあけまのてこゆるりみちのくふひてそ
座そーまこの和そ座ぐうたるる秋野の中ふ有の上社句を添ぐる聲あり。
その洞ふそく 秋風のふきそうをさぐひはこれとりともむふさる人今ー。で死人
そりふおやーくおぼく巻うをさぐひはこれとりともむふさる人今ー。で死人
のの一らひとりおりぶーふるる底これをふぶのぞろのその一らのの井おかより
そそたるんひとりもでありるそのそれの風ふをぐくそそのぶくぼえられを。
おやーくおぼくおうのの人ふこの事をそ一ぶる人ぐうでいそくぶ聖小町公園ふ
ぐぐうそこの和ふーくのちおりふふぐぐとふぐうのの一らまれるりとのぶ。
そふふぶうひふあそれみおれーくたぐくれぐ底をおさく下の句をはけぐり

山神森 逆坂の山腹阿弥陀堂の後ふあり
由緒詳ふ分ふ次
関清水 逆坂の峠ふ法大師史除名跡石の傍ふあり又関の井清水前ふ流世唯一
の清水ふて昔ふ時の長明の時さえ名高さ所ふて今ふ猶ふ清水ふ絶ふ事ふ
古人
若の代ふあ一坂ふの岩清水末ふくまでうと心ふ分ふ 忠岑
逆坂の関ふかうく岩清水いつくふ今やらんを月ふ駒 貫之
捨を
逆坂の関の清水ふ影みへく今やらんを月ふ駒 貫之
無名抄云
あう一人のひそく。逆坂の関のーとふのへぐそうふ井とおぶじおぞとふく

そのところそーでをそたおいさり。とそつけくぶその堂をいさりつそのの
そのやひろとふ我ぐ待る。多ふはそのこそちやふ小野小町よおるー人今あくぬ
おうくふくおぼつそうた事小野てあくをひ待ー時人のの一うふ待ーえ
小野小町云
小野小町ふのぶこふてさぐうふーぐおそろうふぐうふ玉をとふいへ文にみえ
さりぶ文清行ふ手ありとふて、祝ぬれど高野の大師の御社同縁ふいんて。
大師ふ筆おのそーおふおそれをうふ小町ふさうふ成と真法のとふや祝
おぼつうふー

人しり侍れり。しかはあらぬ。しかれ川は別の石にあり。今はあれもなかれぬそこと
しまる人ぞになし。二年寺に因寶房の阿闍梨といへ老僧。さてひとり
其石をしれば。かくれどさる事やしるとこれぬる人もなし。我しなん
のちは。しる人もなくて無しぬべき事と。人にあひてかたりけるよしはこへ
ぬさく。かのあぎり。しれる人のふしをとりて建暦のはじめのとし。十月廿日
あまりの頃。二年寺へゆく。あぎりこゆんしく。かやうにふるはと我。さう
はかしくしる人もかたく侍めるが。めづらしくなん。いかでかしるべきぬ
つらざらんとて。ともなひてゆく。関寺よりかしへ二三丁ばかりゆきて。
みちよりきこのつらに。をとしたちあがれる石に一丈ばかりかるいしのさう
あり。そのさうのあんがしへ三段ばかりいたりて。ゆるる石は。をかはらす
むかしのせんの。しかれ川乃跡なり。道よりも三段ばかりやいりたらん。
いはいといへのしりへ手なりて。当時は水もなくて。ゆんところもなけ
れど。昔のなごり。おもかげにうかひていうになんおぼへ侍し。阿闍梨

かたりくいはく。此しかれにむかひて。水より水にうをひそぶふにたる
家。ちかくまで侍なり。あれ人のをとゝかとは。しる孫どいかにもたゞ人乃
井和にはあらざりけるなめりとぞ。かたり侍し

寺門におはしく應安の旧記をみるに因寶房の名かし。早其に亡滅せしか。又清水の跡が
あるに本文の趣今さぞかにいかり雖し大略清水町のあとりなる也

関明神祠 逢坂上片原町左の上方にあり此邊より大津清水町までの生土神とは
例祭五月廿四日神輿一基清水町御旅所へ御ありあり

祭神二座 一座は猿田彦命又道祖神或は幸神とも称す
一座は稚丸ノ遠城祭神

法撰 しれやこのゆくも帰るもいかれてはしるも知らぬも相坂乃関 稚丸

新古 秋風になひく渉芽のをしをとにをくしる鶴のあはれ世中 仝

同 世中はそもかくてもおかしこと宮もいらやもそてしかなれを 仝

後古 相坂の関のあらしはそけしにに立ぬそぬる世が拾んやる 仝

無名抄云 會坂に関の明神とやはむかしの塚丸のかのいらなのあやかしかはしく。
そこに神となりてをこ結なるべし。いまもうちをくるたよりにこれはむかし
ふかくさのみかどの御使なく。和琴なくひに。良岑宗貞ゆゑ

とくぐ。かよひたんやどの事ゆゑぞおもうげにうかひくぐいうしくこそ侍れ」

それぞ稼丸の姓氏詳ならねども式部卿敦實親王（宇多帝の皇子なり）の雜色に管弦を常に嗜み琵琶を善し自流泉啄木の曲を愛しく敢てこれ以人に傳ず世以道は會坂の関に菴を結んで山居しける平生に弄ぶ琵琶を無名と号ず稼丸頭は童子の如く體は僧に似たり時の人道士といひ又仙ともいふ博雅三位かの流泉啄木の秘曲を習ひたくしば席に通ふ事三葉に逮ぶある時風雨頻なる夜其まで所の切なる感じとく秘曲を殘らず傳し事なぞ江談に見えたり

稼丸の謡曲に延喜帝の皇子とし又は盲人と作れる事其證詳ならず稼丸は異なる道士なしく世の塵埃に染らず無心の境界なれば盲人と作れる事いかれなるなりしもあらず又博雅は延喜帝皇孫なく親王克明の子なくおいしなるなり世なる博雅の三位と中なや

関小川（新千載）

相坂山の南溪より流れ出る小川を大津にて吾妻川といひ

をくは澆川となづけて湖水に入

立ぬるなれば相坂のいしなり関乃小川の花のたゞなれ

（金葉）

吉野山の葉にちるとし會坂の関の小川に錦をりかく

（家淳）

（後頼）

手向山

相坂山の小関明神の後といふいはしへ

手向山

千載

紅葉ぞ成関守神に手向並てくれ坂山成る事にかゝし

（雅伯言實守）

（夫木）

香居たりあふ坂山のさうひ明る手向の神よ我ないを先を

（仲正）

安喜寺

小坂町左にあり寺門長吏に属ず開基智證大師

むかしは此上の山にあり後世にて移ず

本尊立聞観者

長さ尺八寸智證大師の作むかし稼丸立坂の房に弦曲を楽ゆふ成故々立聞しゆゑゆへ此名あり又其日の作れ阿弥陀佛を安置ず

蓮如上人名駒石

石面に無礙光如来と鐫を初は墨書に後世剋に寛正六年の春此上人右徒に襲れ近松寺に赴びし時これ成書ず

関清水明神祠

清水町にあり関明神例祭の御旅所とす

社内に関清水あり後世唯作る物名

世喜寺

門街の左の山手にあり拾芥抄云関寺本尊弥勒志賀郡にありいはしへは伽藍魏々として三井寺の別院之中に恵心僧都もしたに住ゆふ今時宗と成

本尊に阿弥陀佛成安ず

牛塔

當寺門お下塔の北にあり初は関寺建立の時桃石を運ぶ大牛之本尊弥勒のおなく屠ぬまでに落ぬ

近松山顕證寺

大津寺内にあり西本願寺派に河州久寶寺村顕證寺

本尊阿弥陀佛

長さ尺八寸親鸞聖人画像聖徳王七高僧蓮如上人貫二世

蓮淳上人等の画彩成安置ず

傳云寛正六年の春本願寺第八代蓮如上人洛東大谷に寺職しゆゑ時叡山より衆徒三百餘騎押家一時に本願寺成燒討ゆゑそれより蓮如上人所々に移住し堅田より大津に来りゆゑ成門徒浜名太郎左衛門といふ者三井寺成頼しかを長吏より院々へお觸れ寺門五別所の内近松寺を寄附し山門の悪徒を防ぎなり関並蓮如上人あるに止住しゆゑ年三ヶ年に西本願寺親鸞聖人の真影十ヶ年余當山に安置に其後山科御堂へ移されしなり

近松御坊
世喜寺
斗塔

斗塔

春泉齋

屋

近州 大津

京師より初の驛なれば東は関東とも又関東二十八州関西二十八州東よりおしなべて三里大坂より十四里余又東は三里半余之旅籠町の名あり八町とかや此地は北国及び淡海国中の産物奥州等の船にて運び日毎に市をなし京都へ交易す次町数九十六町
諸侯の旅館多し

古今
我命はさしくあるへきものならんしられ大津なよするる白浪　読人しらず

夫木
秋の月もかゝみの山のもみち葉は大津の里にかへしこそすれ　隆祐

新拾遺
関越えて見れもみゆる大津馬とのかち一つれなかいそくなり　和家

拾玉
志賀山ふもと霞とかへし大津の宮こは春乃花園　大僧正慈円

大津宮

日本紀云　天智天皇紀五年是冬京都之鼠向近江移同帝六年三月辛酉朔己卯遷都于近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多云云

夫木
さゝ波や大津の宮に月をみておもへはかれ二條の橋中で　資隆

大津皇子

天武帝皇子也日本紀云容止墻岸音辞俊朗也天智帝に愛せられ長に及んで学ありて文筆を愛す詩賦の興る大津皇子より始るとぞ然ば是時より日本詩賦の初とす

懐風藻
春苑言宴　大津皇子
開衿臨霊沼遊目歩金苑澄清苔水深晻曖霞峯遠驚波共絃響哢鳥與風聞群公倒載帰彭澤宴誰論

練貫水

桜川大津宮の旧蹟今の布政司の北にありて志賀郡は旧址志賀里にありといふ以下に人なし三井寺の裏大練寺の境内にあり方一丈許の池之源サ尺上より涌出づ練貫水金字あり鐘の銘に原伝ニ云
天智帝の御衣とと川練貫しとぞ清澄にして寒暑に増減なし

丹楹道

近松寺山の麓の小径之上古逢坂の関路なり以付寺門丹楹衆二十人関所へ詣し時通ひし道なりとぞ今も三井寺大会の時丹楹衆此道を通る古実多し

長等山

三井寺の上の山をいふ山の南は逢坂山なり此山上古より歌枕に名多し

千載
さゝ波やながらの山の峯つゞきみせばや人に花のさかりを　藤原範綱

新古
わたせるかゝる此山をふみ渡せば尾上をすぐるさゞ波の浦波　藤原良清

新古
見せもやす志かのうら浪よりこむあふきの山の花は　慈円

後撰
ゆかれしやむかしながらの山の井は志川めぐる秋も朽果にける　読人しらず

続古
ときは祢のながらの山のかたちまつ吹くる風も萬代の聲　前中納言匡房

玉葉
さゝ波や浦風寒く秋のよはながらの山に月ぞかたぶく　入道前太政大臣

新千
紅葉ちるながらの山に風ふけばたえてもしらぬさゝ波　前大納言

新後拾
百首の歌
あらましを見しかはも待せざりし長等の山の下水喜ふりくるとも　入道二品親王

三井寺

金堂

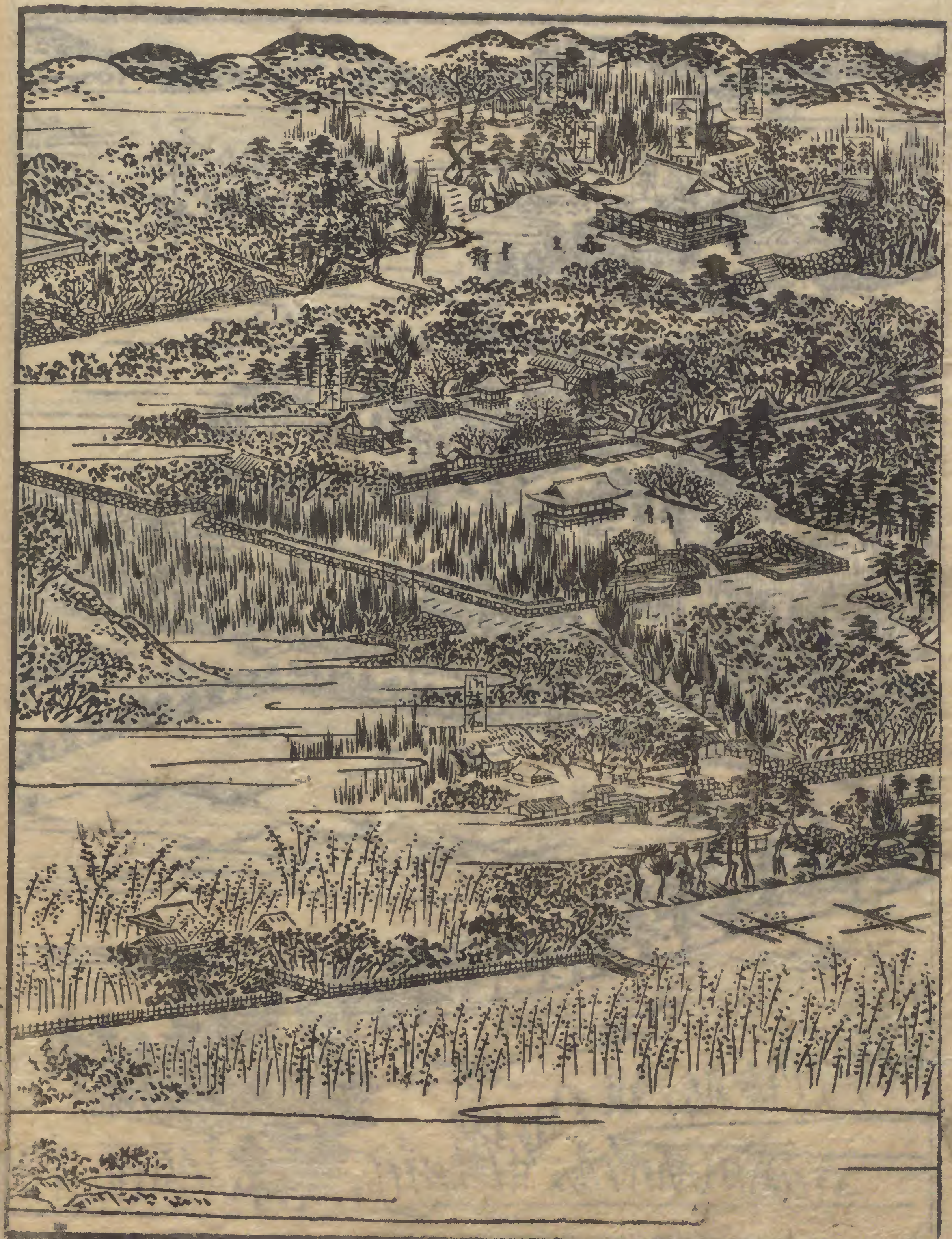
唐院

食堂

洪鐘

御井

三尾社
唐院
不動堂


金堂

いさしへのつれ林ふ
ちるたの
白ひとうはる
志らのうら風
尾蔵寺
近松寺
八幡樓

淡海八景
三井晩鐘
湖面朦朧畫
不成昏鯨高
闇出園城霞
間好是客船
月十倍楓橋
半夜色
相國寺林長老
ちふその曉雲
まばらく三井の
入あひの塔
近湯関白時熙公

長等山園城寺　志賀郡にあり　天台宗　俗號滋賀寺　又三井寺　又寺門と称す

玉葉　をくかみやこ年の古寺かねもむなしくあれとむら〳〵ふりつもる雪こそ次

名所　治ふたて〳〵猪の名をとゝめてより年の清水ふりぬれとさひ〳〵さゝれし寺　道隆　俊秀

又當山の原　大智帝崇九の皇子大友の殿舎かり荘園城邑の地なれば

園城寺と號次ぎ祇園精舎紺園化城なと比をるゝうん元初同帝六年

大和國飛鳥宮より樂々波大津宮ふ遷都ありしに門七年　天皇靈

爰に感〳〵く崇福寺ふ建立〳〵金色丈六の弥勒佛を安〳〵其翌年又

園城寺ふ精舎創立　寺門傳記第六曰　崇福園城俱天智之御願皇子大友

一年故首ふ廢后大友與支奪　奉詔而創両寺分位同等也就中崇福建立魁園城

崇福矣

天智帝の遺勅を蒙り大友皇子の追福のおふ崇福寺ふ他〳〵後〳〵

園城寺を再営〳〵彩次されり殿堂巍々壮厳玲瓏ちら〳〵給孤乃

布金とかる其頃敷待仙僧まに練り〳〵貞観元年の冬智證大師

ふ見え傳法ふ授與〳〵東北の石窟ふ入定を其より大師入唐〳〵て天台山ふ

登り清涼山ふ陟り文殊の霊跡をあ〳〵ほえ寺ふ多龍ありふ招〳〵石象石橋ふ

巡り顕密二教を究尽唐六年ふ〳〵く帰朝〳〵　淸和　光孝　陽成二帝

の戒師と成寛祚延長と祈つて國家泰平を護る於茲二會共暁ふ勤

寺門の繁栄益熾之長等の山嶺入相の接ふ拝と毋穂て唐秋乃月を

佐々波ふ法〳〵望み荊棘しげて驚擾の態ありしかも源三位

頼政ふ為の擔〳〵平家の暴逆ふ伽藍ふ弊せられ行尊いあさちら原ふ諭吟

らんと述懐を誦〳〵天地光くふ山の更を龍虎爭〳〵く茅床睡〳〵衛

右大将頼朝卿ふ當山より牒状を捧〳〵て平家没官の地を寄附〳〵

中ふ平東鑑ふ見え〳〵平家お滅ふ記ふも初々ふんへく世の

人ふ膾炙次ふ寺の高僧記ふ延暦寺より一百餘年魁〳〵く興基

あり〳〵ぞと雖れ二年の古寺と称ぜ〳〵も宜あらん元家初　天智帝

遥ふ入鹿を戮〳〵其罪陳を悔ゆ〳〵く遷宮あり〳〵事當ふ鴻基

の始えとぞ云ふなる

○新羅大神社　寺門小院小谷にあり五社鎮まるの其一つ貞観十七年有司大祚の勧請と再営

祭神素盞烏尊　此社も天皇等與の神像を鎮めて相殿す一般若童子宮王童子と云ふ右小社御子洞あり新羅三郎義光と号ふ

の二男なり新羅三郎義光と号ふ

社傳云　文徳帝仁寿年中有說大師の始めて此山に入唐し天安二年六月八日西に新羅明神と高僧の影法を濳して忽光翁忽然として海上に現れ来朝

上給の時此神と出現し大師奏向して勅を蒙り初めて伽藍を建立し天台の一乗を弘通し給ふ時に素盞尊五十猛抱命と三躰

神秘あり

○三尾明神社　南院琴緒谷にあり五社鎮まるの其二つ長等南院の地主神

祭神赤尾白尾黒尾の神々赤尾は神護景雲三年三月十四日神勅を蒙り此山に垂迹し給ふ

かゝる現ぜ其古跡は大友皇子の社頭にして社傳云二尾影向石あり

赤尾大悪太神　黒尾新羅太神　白尾白山権現

○護法善神社　大門の側にあり五社鎮まるの其一つ毎歳四月十六日両祭次

祭神明星天神像は安置し大師の祀之

本地堂に現世護持安置次

○新宮権現　洞井にあり又名新日吉社　滋岭泉院天喜二年三井寺大伝正

明尊勅諚次又嚴慈年中足利尊氏再興

祭神日吉山王新宮一説に山王二宮園常宮尊　五社鎮まるの其一つあり例祭

五月五日神輿二基寺門焼門大床西之町々の生土神なり

○熊野権現　金堂の側上畑にあり五社鎮まるの其一つ

紀三熊野勧請次

○金堂　寺門中央にあり本尊弥勒仏長さ八歩中華南岳大師伝来法護持

の尊像と本朝欽明帝御宇初て渡る仏像素朝の寂初

○御井　金堂の側にあり天智天武持統三帝御誕の時汲湯

用ゆ故に御井と号ふ又此水

う若尊之會の暁必ず御手をとゝのへ給ふ例なり

く基より井大友皇子の誕生の時も八徳水奥し

○梵鐘　金堂の側上畑の地にあり高サ五尺五寸四分

金堂の側上畑の地にあり高サ五尺五寸四分

佛滅後龍宮城へ入りしが延喜の比撞鐘の音を聞て龍宮

より十種の寶器を賜る其中の一器之

太平記云文保二年三井寺回禄の時鐘山へ飛来て龍と

化し更に半ば龍く盤動寺の鐘あれども山傍怒く

山に小社有ツて龍く尾を

寺門傳記云秀郷宮より落ると云ふ

寺門ふ凶事ある時は全体に汗を流し

時は龍を引くが如く鐘破を一日云々

龍去く○そゝろふ声を發そゝる東元の山しゝ建武の乱ふ逆賊の
集ふく北中ふ埋む捧北中ふおのゝ
を深くの古瑠へくく拯出しくく寺宝くく当山什寶数品の中ふく
仏梵鐘ふ火一くく

○食堂　金堂の東ふあり浴る釋迦仏大鍋
赤銅樞昆首羅天の作

○唐院　金堂の南ふあり初ハ唐僧ふ号次傳法灌頂の道場ふ寺記云
浴ふ和帝の勅をうけく寺院最初の建立の地と
唐の青龍寺ふ模ふ中央智證大師坐像ふ入九す左黄不動尊右
御骨大師ふ相中央ふ同しく英不動ハ兼れ五年のを不初る金ふ姿
を現ト大師ふ告く曰つれハ是不動明王と弘法灌頂のた先あくた茅仮
と云絵く見へ即其像ふ写しく帰朝後日寶祚ふ
護摩堂　唐院ふあり浴場くく護摩ふ修
三層塔　唐院ふあり　御當家にゐんぐ　尊釋迦三尊仏塔初ハ大和國比蘇寺ふ
あり　余めりくまくた移次

新山王神祠　唐院ふあり奥観二年の建大師
勅を奉くうた遷座次

寶藏　唐院境内ふあり大師将来の諸尊教法ふ傳法灌頂の室ふ
藏む什物寺門傳記ふ見へくり

△大日覺王　寶冠　一頂
△阿難尊者　草鞋　傳云尊者七歳時鞋　一足
△尊星王菩薩像　一軀
右五品唐ふ青龍寺傳法阿闍梨法全
△灌頂二度ふ五鈷杵　一具
△五鈷金剛鈴　一口
△白毫佛舍利　粒ふ大和柏指

其外寶仏寶器數品あり

○十八神祠　南院ふあり　護伽藍神とゝ
大師勅を奉祭神ハ七仏経の文ふ配記次
伊勢　大日枝　十禪師　二宮　八幡　賀茂
平野　北野　石上　春日　江文
○辨財天祠　唐院ふあり奥観十七年
舍堂の北池の中ふあり　小院ふあり宝昭院隆弁僧正の
勅作の紫多くく

○住吉祠　働作く

○燈幢石壇　金堂のあふあり　天智天皇
悩く伽藍を創くし奥法供養を修そゝの　潜龍の日逆臣入鹿ふ誅くし其罪根
内陣の三燈ふ中央仏法繁栄ふ　遺跡を又金堂
縁を右ハ国土豊饒ふ朝安ふ
ふ入く三燈ふ
拠ぐとゝ云

○経嵐　梵鐘の側ふあり　尊氏将軍一切経ふ
又奥長七〇ふ　浦本一切経ふ　風む自彩の奥書あり
金堂の東ふあり　教待ハ神通延壽乃仙
○教待仙人入定窟　毛利輝元等附ふ
あり其姥氏を
智院大師ふ見へ
弘教の處くく其後伽藍の東北石窟中に入て
百年ふ座とゝくとも容顔壮年の
遷華とゝ

○教待仙人入定窟　金堂の東ふあり　浦本一切経ふ　風む自彩の奥書あり
又奥長七〇ふ　毛利輝元等附ふ
あり其姥氏を
智院大師ふ見へ
弘教の處くく其後伽藍の東北石窟中に入て
百年ふ座とゝくとも容顔壮年の
遷華とゝ

○圓滿院御殿　寺門境内にあり　聖護院宮　圓滿院宮　實相院宮
此三所門跡をのれく三井の長吏とす

○安樂行堂　小院蓮華谷にあり　地藏　彌陀　釋迦　三尊ともに安次
有證大師の建立

○正法寺　南院にあり　初メハ聖願寺と號し世俗巡禮觀音或ハ
高觀音とも称す　本尊如意輪觀音脇士左毘沙門右堤伊門　寺門傳記云　後三条院御願寺にして延久
四年の建立なり　後三条帝御不豫の時平癒を祈奉らんが為に金色の
御願文を以て一寺を建立せらるゝ勝地なり　惣門西に向ふ　平癒の後叡山の惡僧等身の如意輪觀音像を安置
或ハ云　正法寺ハ初メ南院山上にあり文明九年三月朔日大嶽の瑞雲ありて延久
の如く今の地に移る　次に男女の俗人繼緒の為にとて
福神石　正法寺奥院にあり石塔婆角石像の
二石をいふ　由緒詳ならず
大悲閣　正法寺本堂艮の方にあり　近江の八景眼下にあり　其
景ゆふ　秋中秋の月　松賞をかの住僧
觀望する銀滿碧堂　松賞くの高閣なり

三井寺登覽

何來天地動　玄陰一落一日樓
秋入江波蕩漾雲連三井寺
湘靈鼓瑟思無盡楚客行吟恨竟深
不識關門風兩夜幾人操曲遇知音

周南

○迎松寺　正法寺の西の方山腹にあり　古ハ迎松谷ニ百二十六房あり
三井五別所の其一なり

本尊千手の觀音　金迎長吏を尺二寸智徳大師の作　額に高觀音堂とあり
世人正法寺を巡禮觀音とも云ふ　此觀音ハ高觀音とも
ふるの俗称なり　傍に阿弥陀堂あり　若光寺ハ本尊の模形なりと云ふ　芙蓉仏と
云ふ　堂内に惠心僧都の作と千躰仏あり　護法善神　春天稲荷
金比羅なり　八詠樓　観音堂に隣る高樓にて
東に近江を九別所の一なり　又二に双ふものなし
安然和尚石像圖　南方山上にあり七層石塔婆あり　高一
丈　和尚と傳ふ當寺ハ安然の練り給ひし所なり　幽閑の所なり
則入寂の地なり　山の東に高嶺あり　故に名づく
とぞ　岩頭を穿ち忽水滿出る　是双の靈泉
獨鈷水とぞ　今尚在り

○尾藏寺　迎松寺の山にあり　三井五別所の其一
慶祚阿闍梨古ハ尾藏寺谷に八十坊あり　今僅に五房在り
本尊十一面観音　安次頭に負天胴体ハ毘沙門　足ハ大黒天　故に
三源親ともいふ　祢ハ又笠脱観音とも　異名とぞ　又あの方を町半ほど
も笠ぬげといふ　其名とぞ　又あの方を町半ほど
地あり　傳ふ寛仁三年十二月廿二日入定　年六十五　寺門灌頂僧正の祖
○舘尾八幡宮　尾藏寺の鎮守　康平六年伊豫守源頼義勅を奉じ
足利尊氏心願出陣の時靈瑞あり　故に造営す　祭礼手
流鏑馬あり　今廃す

○微妙寺　剣山のふもとに藏寺のあとあり　三井五別所の其一
阿闍梨むかし九十六房あり　今纔に五房在り

本尊十一面観音又茶師仲次安置
志賀寺ハ紫濃ノ北向不動ノ坂際ニ在
圀城寺四方ハ峯休ト安重ヲ
○水観寺 寺門惣門ノ下路ノ中ニ在
二井五別所ノ其一ニ在リ
本尊茶師仲次安置ス寺門傳記ニハ十一面観音
開基大僧正明尊
○常在寺 二井小院惣門ノ外羅
寺門五別所ノ其一ニ在リ
本尊釋迦仏ヲ安ス開基大僧正行尊當寺西ノ山上ニ千石岩ト
名ケル岩上ニ明神ヲ祭ル
○甲尾明神社 甲尾ハ貴布禰神ノ
鎮座ノ其一ニ在リ 山地ニ傍テ在リ西ニ向ヒ山王中七社ノ内甲尾明神ノ勧請ニ或説云
不動川トヒロマヒ湖水ニ入 又此社ノ下ニ石不動尊アリ寺門四方
ノ流ヲ三筋ニ分ケ流ス
安ス寺内寺外神社堂閣多シ繁ニヨリテ略ス
○亀岳 寺門惣門ニ向ヒ立テリ教待仙人ヲ祭ル奥龍ヲ含シ其骸骨横ハル
岳ノ形ニ似タルヨリ故ニ人呼テ亀岳トイフ
○亀喰橋 教待仙人亀龍ノ骸骨ヲ祭ル池ノ水ヲ流ヲ忽チ
亀岳ノ下ヨリ流レ出ル教待仙人ヲ祭ル樹下ノ流ニ奥龍今ニ多シ
○村雲橋 寺門ノ惣門ヘ向ヒ立テリ時
橋上ヨリ寺門ヘ向ヒ立テリ傳云智證大師ニ次テ日ノ内ニ唐ノ
大師ニ成ントシテ大師疾暁ニシテ日ノ内ニ唐ノ

青龍寺ニ火災ノ難アリシトキ此ノ
玄旁ノ如ク成ク西天ニ向ヒ火害ヲ穏ント
大師ヲ祈リ奉シニ果シテ翌年ニ
火災ノ都東方ヨリ東北ノ
院宇回禄ヲ免カレ備ニ尊師ノ
故ニ村雲橋トイフ
○夜櫻 中ニ植櫻ノ花ニアリ夜ノ
花櫻ノ枯葉シテ今ニ堂ニ
○津明水 南院筒井ニアリ方二尺ノ井ニ
筒井津明ノ旧跡トモ

二王門

大門ノ西ニアリ金剛力士ハ
仲正運慶ノ作アリ

三井十景

筒井喬松　金堂白櫻
唐院夜雨　靈窟古鐘
琴谷冷螢　護法毋楓
正法眺望　詩哥数多アリ石ニ記ス

○北院 蓮華谷 上谷 中谷 下谷

中院

○智證大師傳記和讃 少納言藤原通憲卿ノ作之
歸命頂禮前入唐 雖見元亨釋書不取當山
清和光孝陽成乃 智證大師贈法印
悉達太子乃蹤乎追 三朝奈利十九出家志給天
極特山乃風傳遺 十林苦行十二年

南院

琴緒谷 筒井谷

承和五年冬乃月
嘉祥三年春乃夢
文徳天皇宣下志天
唐乃大中七年尓
天台山仁登天波
清凉山仁望天波
長安洛陽廻津々
西天唐土乃師仁遇天
良諝和尚乃開元寺
法全闍梨乃青龍寺
南嶽天台遺身塔
石象石橋見渡志天
顕教密教學東天
自宗他宗昔無幾
歸朝乃波仁波新羅國
清和天皇元年仁
新渡乃法門千餘軸
爾時大師奏聞志
百六十年行邊留
園城寺仁天波勅仁依里
仁壽殿仁波詔乎兼氣
金光明乃齋會仁波
清凉殿乃決疑仁波
熊野山乎攀志時
八尺乃烏飛來利
權現三所乃宝前仁

大聖明王感見志
山王渡唐乎告給不
入唐求法被許幾
嶺南道尓着尓氣里
大師乃聖跡礼拜志
文殊乃靈地乎巡礼志
勝地名跡場乎踏美
梵文漢語乎窮多利
一乘心蓮花開氣
五瓶智水雨灑久
無畏不空影像院
銀地金地毛修行志幾
在唐几曽六筒年
經論章疏千餘軸
權化乃善神影嚮須
大師歸朝志給天
勅宣下利天弘未利幾
三井仁唐坊建給不
生身弥勒乃附属淂津
宗叡僧正灌頂志
王臣入壇始利幾
身子迦葉乎拉志幾
護法清辨物登勢須
道路迷比天不知程登
道乎示曽奇特奈留
一乘八講修世志加波

松塽扉乎押披幾
戝施乃幣帛乃妙乃色
和尚乃恩德不限良
西山松尾大明神
東門中心天王寺
陽成天皇比敬天
亭子天子比貴天
天台第五乃座主登志天
園城第二乃貫主仁天
一切經論三筒遍
諸尊傳法二百人
五百餘人髪乎剃
王臣道俗歸敬志天
千里万里波掌呂
門弟怪美問志加波
良諝乃遷化乎遠久見天
元璋禪師加去志日波
圓載入海世志魁波
時仁此等乎聞志人
後乃日宗人告志仁曽
寛平三年冬乃天
十月二十九日仁曽
其時十方世界乃
天乃音樂雲響幾
圓寂乃後弟二日
大師頭乎擡氣志仁

神感實仁甚志
醍醐乃妙味乃希乃壱
門第必十憐波年
詞乎通志問答邊
最勝講於曽始免置久
法眼和尚仁令叙世
權少僧都仁補任須
二十口年戒授氣
三十三年法弘年
大乘小乘鏡美懸氣
三部三密珠瑩久
三千余人戒授氣
德行天下仁充滿利
三世十方胸仁在里
金剛薩埵乃告登演不
鐘乎鳴志天諷誦志氣
声乎舉天曽悲泣須留
淚乎流志天悲比幾
驚幾怪美疑比幾
一事毛不違信乎取留
生年七十八仁志天
大涅槃仁波入給不
菩薩聖衆室仁満手
定印結天滅仁入留
三衣乃枕乎替志加波
門弟淚乎流氣利

延長五年冬季 天皇勅宣 志賀 大師於 彼下氣

◎智證大師御影銘 廟塔在二四明嶽ノ東一

雙瞳遠瞻　奇骨欽崟　覺月現相　夢日繫陰
花頂步石　英聲振金　識良諧滅　山瀛阻深

○大友皇子傳 懷風藻出此書天平勝寶三年淡海三船所レ撰也三船者大友皇子曽孫葛野王之孫池邊王之子也

淡海朝大友皇子 諱伊賀采女宅子娘之長子也 魁岸奇偉風範弘深眼中有レ精耀顧盼煒燁唐使劉徳高見而異之曰此皇子風骨不レ似二世間人一實非二此國之分一堂宇夜夢日繫天中洞啓朱衣之老翁捧レ日而至擎授二皇子一忽然而驚異具語二藤原内大臣一歎曰恐聖朝万歳之後有二巨猾間一暴臣一開天道無レ親惟善是輔願大王勤修レ徳以答二天意一不レ足レ憂也臣有二息女一願納二後庭一以供二箕帚之妾一遂結二姻戚一以親二愛之一矣年甫弱冠拜二大政大臣一總二百揆一以試レ之皇子博学多通有二文武材幹一始親二万機一羣下畏而莫レ不二粛然一年二十三立爲二皇太子一延二学士沙宅紹明谷烋春初吉太子天性明悟雅愛二博古一下レ筆成レ章時出二言詩一首

五言侍レ宴二一絶

皇明光二日月一帝徳載二天地一三才並泰 品万國表二臣義一 道徳兼二天訓一 龍顔四海寄二眞宰一 羣無レ監二撫之術一

大友皇子の詩藻ある事 日本紀云 皇子博学多通有二文武材幹一始親二万機一羣下畏而莫レ不二粛然一年二十三立爲二皇太子一延二学士沙宅紹明谷烋春初吉太子天性明悟雅愛二博古一下レ筆成レ章時出二言詩一首

五言侍レ宴二一絶

皇明光二日月一帝徳載二天地一三才並泰 品万國表二臣義一 道徳兼二天訓一 龍顔四海寄二眞宰一 羣無レ監二撫之術一

志賀都 古跡志賀里西郷村小川の内といふ字にあり 慶安比町四方許 上古の地なり 田畑の間に礎ところどころに残れり 旧都の跡なり 其地の中ほどに神社仏閣古塚等あり 一説に淡海大津皇子ここに都ありし時詩賦の規則定まれる初めと記せるものあり

景行天皇五十八年春二月辛丑朔辛亥近江國志賀三歳是謂高穴穂宮 十一月乙酉朔辛卯天皇崩於高穴穂宮 六十年冬十月乙酉朔辛卯天皇崩於高穴穂宮 時年一百六歳葬二於倭國之山邊道上陵一

前王廟陵記云大和國山邊郡上総村東陵一筒所レ在然レ匠一決レ難レ

古人永和礼有哉樂浪乃故京乎見者悲寸

高市古人

千載
をくれやと
しらの
都は
あれにを
むし
かぐらの
山櫻
うかれ
漢人ぞ見し

志賀里（しがのさと）

三井の北に四村あり 字は西郡 正興寺 錦織 新在家 南志賀 村是也

玉葉
秋よいふ都の月に旅寝してなほひやまさる志賀の古里　前権僧正忠源

夫木
橘の花やいりしの花ならん昔をしのぶ志賀の古里　光明峯寺関白

滋賀花園（しがのはなその）

いふかるべし 志賀里 新在家なり

千載
さざ浪や志賀の花園見るたびに昔の人の心をぞしる　祝部成仲

新古
あさぢふの志賀の花園稀にきて問ん春乃ふるさと　摂政太政大臣

新千
文林守なたさの家にひきて昔もさらし志賀の花園　定家

志賀山越（しがのやまごえ）

滋賀里 赤塚より登る峠を越 山中里 白川村へ行く京師に出る 志賀越とも云

古今
山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり　春道列樹

同　志がの山ごえにてよめる
白雪の所もわかずふりしけば岩ほにも咲花とこそ見れ　紀秋岑

後拾
桜花道見えぬまで散りにけりいかがはすべき志賀の山越　橘成元

新千
匂ひ来る風の枝を枝折にて花に越行志賀の山みち　法印定為

滋賀浦（しがのうら）

大津の浦より辛崎及び下坂本 比叡辻の辺までの浦をいへ

拾遺
さざ浪や志賀の浦風いかばかり心のうちの涼しかるらん　右衛門督公任

後拾
みるめこそあふみの海にかたからめ吹きだにかよへ志賀の浦風　和泉式部

新古
志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出る有明の月　家隆

新後撰
志賀の浦の松吹く風のさびしさに夕波千鳥立ち居なくなり　権中納言公實

玉葉
志賀の浦や時雨て渡るうき雲に三上の山ぞ半かくるる　[illegible]

続後撰
逢坂の山をこえてから見わたせば霞に浮く志賀のうら波　後京極摂政

新千
昔おもふ沖の小嶋は旅寝にも心にたてて志賀のうら波　法印定為

新拾遺
志賀の海や白ゆふ花の波は上に霞をかけて風ぞ吹く　家隆

新続古
志賀の浦や潮干る沖は霞つつ秋もおぼろの有明の月　後京極院

滋賀大輪田（しがのおほわだ）

今ささなみだ

続古
昔人の汀は氷にかはれども波ぞとめける志賀の大輪田　寂蓮法師

志賀津（しがのつ）

今さざなみで

続後撰
つれなくもなれし志賀の津のあまはいざ舟君どもに乗るこそ知れ　洞院摂政左大臣

下河邊雄惠

黒主祠

志賀村山家にあり此地の生土神とす

祭神 大伴黒主の霊を祭る 例祭両度六月朔日九月十六日 古今集六歌仙の序に曰

おほとものくろぬしハそのさまいやし いはゞたきゞをおへる山人の花のかげにやすめるがごとし

古今 思ひいでゝ恋しき時ハはつかりのなきてわたると人ハしるらめや 黒ぬし

志かれ寺へまうでける女の志もはうしみると
はへりける大伴くろぬしをときそきくかのあるに仏にかけて
ひさ志れたりきへそそくるまより文つかはしける
あらかつけたりをそのうらにかきつけてかへしに侍る

後撰 なにせんにへたのみるめを思ひけんおきつたまもをかづく身なれば 黒ぬし

無名抄云 志賀のあたりに大道よりおくへ入りて山きはに黒ぬしの明神と申神をはします いはゞ是れハ昔のくろぬしが神になれるなり

伝云黒主ハ光孝天皇の時の人にして大友皇子の苗裔也 後段て大伴の字を用ゆといふ 又志賀の荘頭が家に一軸あり大伴黒主ハ志賀郡の地主なりて大友與多麿の孫都者麿の子也 陽頭より庫寮そなへしたる 縁賜りし半後撰に見え又仁和の始め大嘗会の和哥をはせまゐり あるひハ宇多帝行幸の時も和哥を奉りなどし 志のあるをば是をもつて 齢も百に余りなんとしけれバ此地に人の旧跡ありて心得石といふ 祠の東田の中にあり土人是を石といふ 明神は石にあり 向いて恐れ とぞ称び枯槁のおよふ所まで逍遥しけるに又染田といへる田の字など まうでく神供の節にあり 縁と神供を捧げけるに大伴黒主の 大友の裔なりと後に大友を改て大伴と書しとぞ 又 大伴是

姓氏録に高皇産霊尊の五世天押日命の後なり 景行帝の御時大伴武日連ありて日本武尊に随従して東夷征伐に従ふ 日本紀に詳しくまた大伴武日連を遣はし道臣命の後大伴氏の祖とす 都より此時大伴武日連おりて住せる事必然なり 武日連の後むしろ歴代志賀を領せらるものか 天武紀に大友皇子見えたり 大伴大友の姓ハ遠祖別姓なる事明らかに 双び出る事明なり

後世混ぜざるべく

貫之祠

志賀正興寺村にあり生土神とし勧請の鎮坐の由緒定かならず 哥仙黒主に対していふ名なるべし

崇福廃寺

拾芥抄云 志賀里 其旧蹟定かならず 一名志賀寺 又名建福寺 志賀抄云延暦十七年十大寺の其一なり 天智天皇の御願三井寺の末寺也 又寺門記曰 天智帝七年春夢に一金人現じて此長等山に霊区ありと告る 天皇感あつて大友皇子に勅して此地を求め 錦を金色丈六弥勒仏と安置し園城寺を建しめ給ふ 又崇福寺を建立し

支本 仏人の光たつ禅しめとやされみそさへよき志この比 (晤)

名所考云 此所のきくろへむかしは天智天皇志賀の宮におハしませし時伽藍御建立の御志ありしに 帝の御夢に老人の御門に来り奏していふ 此地にこそ霊地にて 霊かしこき所あり 夫を告るに依て勅使をつかはして見せしめ給ふに おやしたる光さしいろくの奇瑞あれば帝は深く随喜ありて仏殿を 奏して曰我昔此湖の辺に五色の波湖上に浮みよりて其 舞を奏し五婆羅塞と唱へ 古仏霊場伏蔵の地なりと 又 長等山として忽然として見へず 依てかの所に霊場を建らる

則崇福寺と號しけるそれより後湖水のめぐりは神波と號ぶる
此あく所なるべし

續日本紀曰
天平八年八月乙酉以近江國朝書法二百卷施入崇福寺 類聚國史曰
弘仁六年正月崇福梵尺二寺禪居之淨域伽藍之勝地也 同史曰 同年
四月幸近江國滋賀韓嵜便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率
衆僧奉迎於門外 皇帝降輿升堂禮佛更過梵釋寺停輿賦詩
群臣奉和大僧都永忠自煎茶奉御施御被即御船泛湖水國司奉
風俗歌舞五位已上並掾以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差
延喜式曰 崇福寺傳法會料一万束修理料五千束

太平記云
むかし志賀寺の上人とてこれ學勤修の聖戈おはしけり速に彼二界の火宅
を出て永く九品の淨刹に生まんと願ひしかば富貴の人を見ても夏中の
快樂と笑ひ容色の妙なるに逢ても速ひのおれ着想を憐む雲を隣乃
柴の庵をうしてそうと住ばやとにかかる極し庵の松も秋風なく成ふけり
ある時上人柴庵の中を立出てまに一路の杖をさへ肩に八字の扇をさへて

湖水渡志所なるに向て水想觀を成てんとて居して其で其人立ゆひたる
所に京極の御息所志賀の花園の裏に幸し給ひ御詠しく御歸りあり
なるが御車の物見にあげられたるに此上人御目に入合せまいらせておぼへ給ひ
逢ひてたましゐうかれにけり遥に御車のあとに見送りて立てれば京極
もやゝ有る方もなかりければ柴の庵に立歸て本尊に向ひまいらせ觀念の
床の上にも妄想の化のゝ立そひて称名の聲に中にたへかねたる大息のゝ
はかれける物も哀かぐさむるもやと嘗山の雲とながむれどいとゞ心もうた迷ひ
閑窓の月にうちぬけば忘れぬ忘れぬ忘れぬ今生の忘念つゐに離れざれば
後生の涙也成ぬべければ京極の御息所に一端中にくんなさく
涙縁ともせばやとおもひて上人狐裘に鳩の杖をはさかくく京極の御息所に
御所へ來て鞠のつぼれ此里の本に一日一夜を立てりける所の人にそれいかなる
修行者にしらせ人ゆらんとあやしむるもかかりけるに御息所御簾の
内よりたるに御詠せられて是にいかさは志賀の花見の心へるさに同を

紫服寺廢寺 淺瀬倉義景の家臣枝若盛安といふ者天文年中再興
しく盛安寺 改むと云寺ふあり
あり云く汀祇瓜脱 都て廢寺の旧跡をいふ
観音あり云古跡あり
あらごぼね
梵釋廢寺 寺門傳記補畧云長等山東の麓其古蹟しるし
始造梵釋寺云云 高僧記云 天皇等身之像之跋祇之初為登極御祈也拾芥抄云
天帝釋各長五尺 天皇延暦五年春正月 依勅於近江國滋賀郡
十五大寺其一寺と梵釋寺 迫江國水田百町 勅施入
同十一年 迫江國水田百町 勅施入
明智光秀城墟 志賀穴太村の上方ふあり 今名物古人物名所圖會
六月ふ廢て盛安寺ふ改ふ 智左馬助竜る天正十年
唐崎 大津より小弐里ふあり 千載
波の花沖こぎたてちりくる雪や氷の底と風や成らん 伊勢
月のけふ消ぬ氷とみるかぐら哉 新古今
樂々浪や志賀の辛崎風波もなくて花ぞ散ける 新勅撰
こぎたれし淡海の渕も真砂のはてそ春の余波ぞ立ちわたれる 後拾遺
さゝなみや志賀の辛崎古りにし人待ち顔に秋風を吹 後葉和歌集

今志賀津坂村ふ建福寺の旧跡ふく又通ちふく又津立宗の寺あり又神坂峠ふ
紫福寺の旧跡ふく盛安寺ふく天台宗の寺あり山寺の縁起ふ瑞應山

後朝倉義景の家臣枝若盛安といふ者天文年中再興
改むと云寺ふあり 慈心院 都の北の阿弥陀仏 東
観音あり云古跡あり 汀祇瓜脱 都て廢寺の旧跡をいふ
あらごぼね
梵釋廢寺 寺門傳記補畧云長等山東の麓其古蹟しるし
始造梵釋寺云云 高僧記云 天皇等身之像之跋祇之初為登極御祈也拾芥抄云
天帝釋各長五尺 天皇延暦五年春正月 依勅於近江國滋賀郡
十五大寺其一寺と梵釋寺 迫江國水田百町 勅施入
同十一年 迫江國水田百町 勅施入
明智光秀城墟 志賀穴太村の上方ふあり 今名物古人物名所圖會
六月ふ廢て盛安寺ふ改ふ 智左馬助竜る天正十年
唐崎 大津より小弐里ふあり 千載
波の花沖こぎたてちりくる雪や氷の底と風や成らん 伊勢
月のけふ消ぬ氷とみるかぐら哉 新古今
樂々浪や志賀の辛崎風波もなくて花ぞ散ける 新勅撰
こぎたれし淡海の渕も真砂のはてそ春の余波ぞ立ちわたれる 後拾遺
さゝなみや志賀の辛崎古りにし人待ち顔に秋風を吹 後葉和歌集

千載
いのとなく
ましのる林に
淡月れ
光をやとす
志かの
かしこさに
後橋性憲

唐崎社
一ツ松

山王宗祚供和

初夏
さく波や
志かの浦松
ふりにかり
逢世に
子日
なりしに
後成

かしこさの
松にまたより
朧みて
[illegible]

明名光秀滅治

明智左馬助光秀
山崎合戦敗まて
坂本城へ落ゆく時
大津にて羽柴方
坂本太郎秀政に
囲れ途方かく
名なる駿馬に
乗られば湖水一
ざんぶと乗こみ
猶聖永徳が遠
玄龍の陣羽織に
三ツ山の兜を着
威風凛々として
湖上をわたり
庫崎の松乃
汀に着しを
古今の雄将
楚の頂王乃
集にてつたり

おもしげにも比せん
歌味方さまたに
見て賞嘆せば
とりつかわし

思じく海河に
ひたるは実は馬上
にあらず其騎人
の緩鞍鐙に
付歩り立まく
おうだひたる海の
昔の佐々は梶原
もしれん馬上
みくひたれど
馬居ぎくして
動りに足馬術
のおひんとぞ

法橋 叶倶

山王衆唐崇神供

国立公文書館
National Archives of Japan

唐崎神祠　本尊の松の下にあり　日吉山王の摂社
日吉の社傳伊勢国守護
祭神海少童命　毎年六月晦日暮
御神詠　世俗千日参とも云
淡海(あふみ)ぢや幾世(いくよ)経(へ)ぬらん唐崎(からさき)の松(まつ)の木陰(こかげ)に神(かみ)のすむ覧(らん)
　　行基(ぎょうき)
行基(ぎょうき)菩薩(ぼさつ)の作(つく)らせ給(たま)ふおろし細(ほそ)の神(かみ)のうけおさめ
　　平忠盛(たいらのただもり)
おくふかそまもりの渚(なぎさ)も今(いま)八幡(やはた)
　　高麗(こま)法師(ほうし)
(重)山王例祭(さんのうれいさい)八月中申日(はちがつちゅうさるのひ)申刻(さるのこく)に至(いた)り七社(しちしゃ)の神輿(しんよ)大宮(おおみや)より下(くだ)る八柳(やなぎ)
土俗(どぞく)七本柳(しちほんやなぎ)
(こう)(ぞく)(ひ)より船(ふね)(そう)一艘(いっそう)小(ちい)漕(こ)つれ幸(さち)の松(まつ)を湖上(こじょう)に双(ならぶ)ぶ勝所(しょうしょ)なり
又(また)神供船(じんぐせん)名楽(なぐら)を奏(そう)し七人(しちにん)の童(わらべ)は猿(さる)の形(かたち)を真似(まね)び社僧(しゃそう)は蒲桃(ぶどう)
神供(じんぐ)栗(くり)の紙(かみ)を湖上(こじょう)に散(ちら)す大宮(おおみや)一社(いっしゃ)の神供(じんぐ)は神輿(しんよ)(まえ)に置(おく)社人(しゃにん)白幣(はくへい)茶
一袋(ひとふくろ)を添(そえ)て船(ふね)より船(ふね)に賜(たまわ)る日吉(ひよし)の社人(しゃにん)渡(わた)し放(はな)つ神式(しんしき)お調(ととの)へ神供(じんぐ)船(ぶね)
より相撲(すもう)の太鼓(たいこ)を撃(うて)ば七社(しちしゃ)の神輿(しんよ)又(また)一散(いっさん)に小(ちい)漕(こ)つれ(一散小漕つれ)若宮(わかみや)の渓(たに)へ還(かえ)り御(ご)
ます山神楽(やまかぐら)を奏(そう)し多武峰(とうのみね)の賜(たまわ)りもの早稲(わせ)及(および)遠近(おちこち)の貴賤(きせん)こぞり乗(のっ)て湖上(こじょう)
に船(ふね)を浮(うか)べ家々(いえいえ)の紋(もん)の幕(まく)を立(たて)めぐらし陸(りく)より渓(たに)松風(まつかぜ)颯々(さっさつ)と漕(こ)入(いれ)

聲(こえ)々(ごえ)に揉(もみ)の声(こえ)楽(がく)々(がく)と沿(そう)の若楫(わかかじ)櫂(かい)の
湖上(こじょう)ふなうた船中(せんちゅう)翻(ひるがえ)る官司船(かんしぶね)諸庶厮(しょしょしもべ)の船
もろこみ色(いろ)を争(あらそ)ひ松(まつ)ふぢ及(および)鵜都(うと)の余波(なごり)今(いま)もありとぞ
風色(ふうしょく)(ふうしょく)
新後撰　ありし世(よ)や汀(みぎわ)も浦(うら)もふぢ波(なみ)の松(まつ)のみ昔(むかし)の名(な)のみ残(のこ)れる
　　祝部成茂(はふりべのなりしげ)
風雅　久かたの天(あま)は日吉(ひよし)の神(かみ)まもり月(つき)の光(ひかり)も先(まず)社人(しゃにん)(くら)
　　(通二宗親王(みちふたむねしんのう)
唐崎(からさき)一ツ松(ひとつまつ)　本儀(ほんぎ)の候(そうら)ふ社(やしろ)瀬(せ)あり　邪記(じゃき)に云(いう)
湖水(こすい)へ磯(いそ)より松(まつ)枝葉(えだは)繁(しげ)り出(いで)し山(やま)事(こと)古来(こらい)より甲乙(こうおつ)なし
松(まつ)の枝(えだ)ふえそうふ一ツ松(ひとつまつ)と称(しょう)す孫君(まごぎみ)植(うえ)給(たまう)ふ
異(い)なるゆへ一ツ松(ひとつまつ)とも云(いう)ふ
　　(通二宗親王(みちふたむねしんのう)
ふるさとやをとふ人(ひと)ゆのいみ一(ひと)ツ松(まつ)
　　注二位(ちゅうにい)
それ幸(さち)崎(さき)の霊松(れいしょう)株(かぶ)の園五尋高三丈餘(ごじんたかさみたけあまり)数(かず)の枝葉(えだは)四方(しほう)へ繁(しげ)りて
あらら社頭(しゃとう)へ靡(なび)き湖上(こじょう)へ秀遠(ひでとお)く眺(ながめ)望(のぞ)の勝(すぐ)れ遠近(おちこち)(ちかく)視(み)る
　　二条為親(にじょうためちか)
　　卿(きょう)

蟠龍に似たり四時蒼々やしまの君子の操成所し霜雪成凌ぐ子葉成
庸とは湖照る朝日かけたる松の葉あしたかく屋貨浦ふく風の夕しかれ
秋ちらぬ色成雨し其ハ寢こゝろ朧々たるに沖の船ちいさく夏の月れ
涼しきに悠々たるさゞ波の音琴の音初あらしあられふる秋雪は
曙みかしは松の積素なる色しきれど子葉を屋上ぞ其精高年と成その
實を嚼へば長生成得る脂ハ地中に沈て茯苓と成又龍骨となる青州乃
貢丁固が夏始皇ハ五太夫に封じ玄牂の保路をしらしむ本朝にも住吉
高砂曾根武隈の名松ありといへども其古松第一にして又第二にならぬ
ものなしかゝ海靈樹の蔭にやがりしと物のみがりを得るも亦なた
めでゝ成ぬ先しにやあらん

懷風藻

隴上孤松翠凌雲心本明餘根堅厚地
貞質指高天弱枝異高艸茂葉同柱榮
孫楚高貞節隱居脫笠輕

大納言直大二中臣朝臣

内裏清涼殿迄紙形

志の浦や松成あらしの吹しなさて浪とをく水の水うみ

兼九朝大納言光祖卿

東坂本
西教寺
朱迎寺

山王
二宮
十禪師

日吉山王
大宮
聖真子
客人宮
八王子
三ノ宮

日吉山王神社　又日枝又禅敝又比敝又古人の假字多く拂州の住吉もありしよし記日本紀に見えたり

神名帳云日吉ノ神社名神大延喜式

近江國滋賀郡坂本に坐

ひえてあく日吉社神うたふなのぬさかけね日吉の教々ふ七のうけ国をうう

後法興院

初ぞ思ふに日吉の教あまた浪もあう志しまの道　民部卿為家

○大宮　大比叡大明神　又大黒天君と名ばく日枝と嶺ふ

又津宮遷都の後白鳳来中坂本に遷次大泰階産主慶の命うう

七社倶ふ本地佛ヒ或ハ観世音　天智天皇御宇

竹生　左右ふあう　向拝と秋次住吉八幡と勧請ふ日枝大神の補佐とふ

先右ふ北の王權あう

後法興院　日吉ふうてをくるのかふ大宮神

いあ〳〵の露ぬ林ふ散花の匂ひ　坂本社務記

波止土濃　神名の渓川の流をて水五水流合ふ七瀬の走ふ

波の響た止うく土濃あう　権現　其實ふ無有愛染乃

詫宣あう故ふ此地を波止土濃とふ　大悲代受生悉有仏性如来常住無

○二ノ宮　神路山ふあう　小比叡大明神と秋次

摩多羅神又金毘羅神あう〳〵く　大宮より路あう

十二神の中ぬ一神として本地ろ

某卿如来　攝社　竈殿　荒行事　稲荷

疱井　二ノ宮の傍ふあう傳教大師

存ぬの時靈竜井うう現ぬ名ふたる水極て清く味ひ甘輕茶の点煎ふ可あう

○聖真子宮　大宮の東ふあう　大武帝元年奴なふ鎮坐

祭神天忍穂耳尊　本地阿弥陀如来

洞ふいあ〳〵く廊あう　舞楽　金鼓の撞ふ

廊の内ふ九燈を照〳〵く　九ふの澤土ふ

うううく比叡山　日吉社　踏のもろをうえ

物語　志賀の浦ふえの色乃波うそくえ

桓武帝石浮圖　波止土濃の東ふあう

白河院の御願

春日社　大宮の若社来をて　竈殿祠

中ふ小石あう

哮字門　神路山ふあう　大宮坂路のふあう　朱ふ柱上ふ哮の字の

浦通脇金合鮒を表次伝之懸合る名ふ

摩多羅神又金毘羅神あう〳〵く　祭神国常立尊

十二神の中ぬ一神として本地ろ　大宮と日吉ふ

某卿如来　攝社　竈殿　荒行事　稲荷

疱井　二ノ宮の傍ふあう傳教大師

存ぬの時靈竜井うう現ぬ名ふたる水極て清く味ひ甘輕茶の点煎ふ可あう

○聖真子宮　大宮の東ふあう　大武帝元年奴なふ鎮坐

祭神天忍穂耳尊　本地阿弥陀如来

日吉二ノ宮のあ殿ふ撮る六ふの句い都鄙俳士の名句と撰ふ三十六歌仙を通ふ和て世ふ名ふ一社頭宮家より修理あるはも未ふ色紙も補修ありこそ

本地堂　本尊阿弥陀佛　惠心大師の作　洛東真如堂の本尊と同作同像

橘樹二社神　本地の絵を表す

杨社　聖女祠　此神の本樂なり　其家の宝卿尊信篤し　電殿　氣比祠共に像あり

○客人宮　聖真子の次あり　向山の麓と称す

祭神伊弉諾尊　本地十一面観北陸の高岩より此山に来現し　中古人客人宮と号す

景向石　延喜元年六月十八日　忽落来る　大徐此山に向ふ　故に名つく　杨社　拝殿　鈴宮　拝殿　神楽殿　祇園祠　小祠

○十禅師宮　二ノ宮に在り　延喜二年鎮座

祭神天瓊々杵尊　本地地蔵菩薩

杨社　小禅師祠　内王子祠

法橋惟舟　あそろそと　詞　さたみ川　富士の名

貞室　涼しさの　うれや　夜半の月

玄札　青のから　ふくさや　名の花

女そそ　ぬふえ　笑つ　いうに　郭公

宗因　そろ　秋も　もの　なら　夏や

常矩　教の枝　より　栗や　柳麻木

立南　これわろ　人の　家の　花ござう

正式　そそれつて　ぎりそや　その夜半

梅盛　うぐひ　おりそ　そもや　茶の座

幸和　ひひて　七夕の　睦言　八重桜

西鶴　毛ら三筋　たらして　やれう　ぬるる

立志　次頃　堂ぐらの　のと　おろう

和及法師　あ秋く　賀ござ　秋の　庭覚ル

秋風　猫のれて　ふるる　ふござ　ル

太敬　如来　わ神　ござ　山猿

一扶　頂髪　ゆの　ル毛　から　ゆり

女性の　そうれ　栗ふ　いる　落ル

立志　泣つつや　嗜なこ　きる　郭公

都水　月ふ　ものから　海辺つる

一晶　松ふ　飛御　ちこう　名の春

真角　稲妻や　きのふ　東　くへ　西

信徳　そこひの　猫もろ　ル　小笹ル

素堂　ぼふ茶来　ル運ふ　ころん

芭蕉翁　茶売て　春の袋や　ゆけ頭巾

夢妙幢石　二ノ宮　楼門のおかあり　観音大士を安る

杨社　岩瀧祠　悪王子祠　山王祠　下八王子祠　傾ル二ノ宮の馬場ふあり

舩石　二宮のお林の中ふあり　下の八王子　新向石と

明星水　下八王子の東林中ふあり

○八王子宮　八王子山ふあり　祭神天皇　弟位元年　此年ふ鎮座　祭神國狭槌尊　部ル跡　鎮座　大法王子也　本地ふる観音

○二ノ宮　八王子山ふあり　延暦二年　此年ふ鎮座

祭神惶根尊　本地若賢或記云　三貴女良嶽ル　泊瀬ル　故ふ二宮ともいふ

杨社　委細未詳

金岩　八王子山ふあり　此神もに新向ル

○中七社　牛頭ふ天行疫　卑尾　氣比　下八王子　王子宮　聖女

○下七社　小禅師　悪王子　新行疫　岩瀧　山末　飯宮　電殿

巳上山王二十一社あり本地ハ大薬院
在之慶命神託ありしく立る忽ち
迷情の臆説あり後日右山王一實
神道二諦即一の義山家ありしく
古且しく伝曉

○大権現 神宮 真葛原の
上ニあり

贈佛堂 神宮の中腹にあり
本尊某師作也

金鼓 寛永二年丙寅十二月と鐫る
銘文畧ス

○権式大皇御廟 真葛原の
東にあり

○慈眼大師廟 神陵下檀の北にあり
南光坊ゟ台嶺
戒壇堂の儀ニあり

後古 聖真子宮ゟくみてきりける
客人の文にもあり

やくくゝ光ハくくてあくーしー
客人の社参くゝのうち久保みくゝ
後路 いまーへの戒法おほくくゝ山様今も
勅年 客人の性質と
ゟくゝあくゝむんもふれかゝれ初一番乃ち
ゟくゝ

性少僧都
良仙

法之荘務記

僧へそ

茶之祭云道士

後撰 十禅師ゟくくくきりける

歎のゝ山有明の月ハやどりくゝ我立杜のこりやそをも

主當社ゝ王七の御座ーあの御神巍然ゝーて鎮座給ーまた中ゝも
大宮二宮八日枝の山領ゝ神代ゟり天降ゟ六合の本柱ゟー
天子本命の道場朝敵降伏の神威平天下の御護あり若ゝ波や
毋猿ゟ湖ゝ止観をたくーふの巌ゟ一念三千の横を別ーに陽ゝ
向ひ後ゝやむけ社頭森々ゟーくゝ溪の流ゝだくゝ
神祠くゝのたゝを向ひ他ゝ異ゝもしーく社一社玲瓏ゟり實ゝ神秀の森ゝ
あいまる新淡海一州の霊窟ゝ一基ゝの山脩檜笠を高ゝあげてやゝり
くゝとぐり大廻の阿闍梨ゝ洛中の神社ゝでも巡礼ーてゆきくゝの人今
ゝ結緣ーに日毎ゝ多くくの道俗ゝ群集くゝあり
おびくゝたる拝神代ゝ人のゝ多ゝ
をゝくゝの罪ゝ外ゝかーに地神の末ゝ
國ゝを傳ゝ人因茲神と現ーに仏と

兩部習合一つも示導一むり
浮屠氏のあらひ願ひ本地を神とそる
の勅ざ給驗ある也一

日吉神詠告傳教大師一羅山子神社考出

波田耶麻夜於比磨乃寸幾乃比登里伊波
阿良之毛左牟志登布比登茂奈志

古
おろろめやろ人の子日吉小松おひん末までさらゆへ一と云

仲哀八日吉社司社務のうろのふたまりたる杉の木小
枝ふたつ有ける中より

拾遺
祢ことかろる日吉の社小松綿うたそ

新後撰
おひふかひく日吉の客そ君のあるへき七の星乃照事光そ

日吉五社前のおもり杉の中より

玉葉
うりそく法のそふ給守るとく

新古
迷惑のそろと
永あのむ七の社乃ゆくすえ守るとく

今
拾玉
永意い松とそ人のそあかひて

日
りあ人の祢ひとそ川の渓風

三津い大津志津今津之名松なふあり

○真菅原
権現山の下扶馬場をく意鎮和尚の御院
真菅原い意鎮古水小至五よりまての称名法也
○そ法ふたら来ふ風さくあり

○四ツ屋若宮
下坂なり四ツ屋町ふあり
大将軍ふ祀る

○登町若宮
下坂なり町ふあり
客人宮の一躰ふ

○奥成宮
下坂なり町ふあり
神躰道祖神

○比叡辻
下坂なり町ふあり

○石占井
上坂なり岩神町ふあり
此祢足を洗ふ井ふ

○大多居
素木柱馬場先ふあり
太神門とて

○妙見祠
生源寺の境ふあり
伝教大師の母ふ祀る

○三津百枝祠
八条の上ふあり
大師の父君ふ祀る

○和泰和汗塚
南側ふあり
馬場先

傳云此塚ハ大師出誕の地
隣の緒成収一所之

○大政所宿院
馬場なり西側ふあり
神輿入時ふ此宿院ふ
御休ふ給ふ
初夜晨朝ふ勤行ふ
夜ふ入ふ
神輿ふ
奉田楽法師ふ
参ふ
門の馬場より神輿比社ふ
又宮

○南若宮
上ハ同前ふあり
客人宮の一躰ふ

○同社
八王子ふあり
客人宮の一躰ふ

○磯成宮
富岩町ふあり
天照太祢ふ祭る

○若宮
比叡辻ふあり
東祢二ノ宮一躰

○同祠
石占井の傍ふあり
又社の注五
整石あり

○生源寺
馬場の小側ふあり
伝教大師出誕の地あり
寺門ふあり
馬場の釜ハ跡ハ
鐘圖ふあり

○大将軍祠
生源寺の上五あり
伝教大師の生土祢ふ

○小五月會図
馬場小側ふあり
五月五日ふ神輿ふ
弘仁十年
辺年中紅ふ連一
神来ふりふ又競馬ふあり

○歓喜石
馬場先ふあり
又荒祢岩ともふ

○大政所宿院
馬場なり西側ふあり
五間、毎年四月中未日の祢事
宝町ふ王社ふり
ふく神供
を
初夜晨朝ふ勤行ふ
参田楽法師ふ来ふく
夜ふ入ふ
門の馬場より神輿比社ふ
又宮

のお殿（墨幸）七社と合せまつる（仁徳天皇）
○王子宮（大政所のおふあり）（紀州一王子也）
○亂祠　王子宮の西ふあり　糸并大黒天
○往岸所（大政所のおふあり）　惹覺大師の所房也
○早尾祠　早尾坂ふあり尾を尾とも　糸并後田老令
○走井宮　走井ふあり　糸并　（源経法師　娘令　本地弁天）
○塔下總社（波止土濃ふあり日本　大ふ神祇を
平將門　調伏の時ここに勧く）
○八柳　（大津八柳　あく権現初く出船の儀を今ここに准ふる）
（下吸本の淡ふあり　柳町と
舟よせ（海上の御幸ふやうさたのむ）を祈やひまつる　（北方法際）
○滋賀院　（馬場の南ふあり　滋賀院の
坂本御殿と称ス　門ありふあり）
○神路山　大宮より二ノ宮ことの
社なり
○主当宮の神壷浩々ゝく廃人の計ある事統ク次第宮七社中ノ
七社下七社合く山王廿一社ことく小社八十七社本都て一百八社ノ

○霊石　（王子宮ふあり高一王子柳ふあり
古た風雨ゝく柳王の足跡石あり
又二合石ともあり）
○地蔵堂　（早尾社の下ふあり
惣数大師自作の石地蔵安ル）
○走井大師堂　早尾坂小祠ふあり
元三大師を安ル
○猿塚　（峠ふる居のあふあり往古の猿居付
ちふ世む窟あり庵後通ことく）

公事根源ふ云日吉糸ふ中申日神輿ハ洛西松尾の社と同神ゝて大ふ
吹神あり　後朱雀帝長久四年六月八日ふ七ゝ社の内ふくわる　滋三条院
御宇延久元年四月廿二日ふ糸并ふ遷ふ　白風二年
天武天皇昇位二年ノ社傳ふ　上巳日ふ大津宮八柳浦ふ山王神幸あり
天智帝の御宇と記ス
湖上五二艘の漁舟あり　老人の田中恒世を人の夫晴光との具ハ山王権現
示ゝて曰汝等ワ二人ゝ奉崇松の下ふ誘ふ　二人の者ゝ之ゝ従ふ則漁舟ふ
漕つゝく神幸ゝするふ山王伯ふ曰我ふ齊忌の神供をゝゝ恒世對ゝく云
漁舟ふ好物ふゝ芙楊の小筍の中ふ栗飯あり汚穢あり汝神供ふ献ゝ
べゝとゝく覆盆子の葉ふ盛ゝちゝ　（北方法際）
漁舟ふ棹さゝく韓崎孤松の下ふ到る権現ふ示ゝく曰糸舩の神遊び
栗飯の神供懇ふ忍ふ汝等子孫永ゝく毎年四月中申日ふ松莖ふ神幸
ゐさゝわ栗飯を神供をゝゝと云終ゝく神路山波止土濃の野ゝ還幸ゝ
ゐふ是より神糸ふ恒例ゝゝく古實をふゝゝ先ッ申のお未乃日ふる

八王子三ノ宮二社の神輿ハ八王子山の宝殿より舁下すに神輿ハ舁数十人宙
みくうけれバ坂路が趨でゆる労ひ猛にして死生が辨じがたし是を神輿落し
といへり夫より大政所に二ノ宮十禅師八王子三ノ宮の四ツの神輿を遷し酉乃
剋に京師よりの神供を献る晩に及て獅子番田楽あり初更の比ほひ相圖
ありて四社の神輿の轅を一度に落しされど一散に御後を争ひて走り
あれバ又宵宮落しといふ鼠祠のおほく御後の勝負を極め大宮が殿
に入ます申の當日ハ山門の大衆ハ横被輔に羅を坂本の衆徒公人ハ
甲冑が粧ひて社頭へ引烈ハ其附大に猛威を震ひ神式ある人の非礼が
乱を禁るにあれむかし官幣の勅使東輿の遺風とおもふる様姿のおほく獅子
番田楽あり榊ワてし神主代の児恒世童子鬼令餓子ハ東帯おほく大津し
馬場村より出る七社の神輿ハ申の刻に神幸あり惣合ゆうに趨る事矢の
ぬし瀬石る居おほく御後の勝負を極む神輿ハあがれも飛ぶがごとくに走りて
八ツ柳の濱に到る諸人これを見んとて横町を抜て田圃の畔を走りて又腰

刃をかざげ飯笥が捧て走るもあり木の葉の風に誘はるゝがごとし七社の神輿
ハ八ツ柳より祭船ありて辛崎御旅所に到りておの〳〵恒例の神供が献る
祭式畢りて又濱辺へ着岸しやがて本社へ還幸あらし
なるあれとおほんとうく遠近の貴賤馬場に群集を茶店ハ多く筵を双べて供
所を設け商人ハ小店が出して種々を賣ハ酒賣鮓賣粽賣引豆落し水
嚢入辻的あされり熟の吹矢ハ群衆の中を賣ありく旅舎の泊人ハ座数乃
狭きが恨と笠を脱ざる者ハ藝國の拵が常る傳云山王祭ハ故實あてがしこに
多くしが拵二月中ノ申日より始り近郷近在近江七浦みな此祭に預る読に
七年観ざれバとく〳〵見はてしかてし年茶果ありて久遠に及ぶといひ來りし
加様の古實今の世まで残まる祭祀稀なれバ邑土遠境の人も生涯一度ハ
観ざんであるべらずみなまれ治平安民の行事なり

千載　承ふあひ日吉の祭ハ奥山の宮社戸まそもにぎはひやる　素圃

拾玉　わ祈ても賀茂と日吉とおへひまま同じ卯月の榊とそとる　全

山王系ハ卯月中ノ申日
ゆく坂本法師ニ人なぞ
古実ハ乱し馬場通の
り烈荘観ことごとく
圖ニ入る事
然ればあく
ゆへ僅十ヵ
一とあらはれ
のこ

比叡山城江二州ニ跨ル日枝ノ禪叡ノ天台山ノ台嶺ノ良嶽ノ北嶺ノ都ニ冠ニ上ル称ニ又和可ニ我立仙ト称ス

神社考云

伊弉諾伊弉冊立于天浮橋上以天瓊矛探滄海其矛鋒滴潮凝爲一島名曰磯馭盧嶋是日枝山也

諸社根元記云

平安の帝都ハ天上の名流をあらはせる國なり良ヲあらはすなり日浮といふ山あり日此神の御光成称ぐくもその光成浮ぐる所成諸神あまつ成行なり日成浮べきといふ山ヲ

日浮の山と名ばく

懐風藻云

和藤江守詠禪叡山先考之舊禪處栴樹之作

○近江惟帝里禪叡寔神山山靜俗塵寂谷閒眞理等於穆我先考獨悟闡芳緣寶殿臨空構梵鐘入風傳烟雲万古色松柏九冬專

○日月荏苒去慈範獨依依寂寞精禪處俄爲積艸墀古樹三秋落寒草九月衰唯餘兩楊樹孝鳥朝夕悲

此二首の詩ハ天平勝宝三年十一月淡海三船の撰まれし懐風藻に出たり傳教大師より已来に宮会ある事其證なり延暦寺根本中堂ハ延暦年中傳教大師の建立其外三塔及び横川飯室五勅寺等ハ世々の高僧造立之都名所圖會に見へたれバ此に畧に

拾玉

叡山ハ花の都ぬしとこゝに鬼のる門をぬさくとそきく

義鎮

国立公文書館
National Archives of Japan

浮洲堂

比良

堅田浦

国立公文書館
National Archives of Japan

四明嶽比叡山の絶頂山王社より東南の方へ行く事十町許小祠あり摘社なり山王社より中堂まで二十町四明嶽より中堂へ八町中堂より八町許東南の方へ行く事八町許大師の作堂ありこれ日枝の頂上之根本一様もかすれ根並のみ茂りて東の方へ三四町許りを四明嶽と称す慈覚大師ここに庵室を結ひ給ふ是山城近江の国境なり

中堂より少けし西北へ出ればまた一つの高嶺あり

廟塔あり四方沼の玉垣めぐらしたり

又四明嶽へ山州岩一の高嶺あり

西南ハ帝城の巍然たる花ひ暗川大井の二流愛宕高雄の連岑雲端ハ淀川の流ハ長く遠く眺望せば雑波津の金城其西ハ滄海洋々たり

近く帆檣の船ハ毘虫の蠢動の如く東南の眼下ハ唐崎の孤松大津浦粟津の城邑多の長橋小の方ハ琵琶湖の楽々波悠々たる一水の内にまたに湧き琵琶比良膳吹の襲峰僊遊源く湖上ハ沖の鴎竹生島も沿の上ふちくたく今は海津の者船ハ田夫猪のつゝ舟ハ水雲中に絆ふ會稽山の況ハ四明の高嶺吾か敢とと書しも同日の論ぜ峻

も四方明ふれを四明の名あり秋の日雲消し天外蒼々たる時ハ駿河乃富士山ハ崇ようえゆゝ百富士とうたふ者ハ此山の絵図あり日枝の山ハ三十里の湖水乃低を流く其よう東の方ハ吾尾之遠四州の間ハ高山遠の秋葉ハ長嶺ハしく高峯ハあらず蒼天ハおよそ見ゆるとの事疑ハくべからず傳聞元弘建武の乱ハ山ハ皇居あらく講堂の洪鐘ハ兵革変々元亀ハ信長の暴逆時世ハ変ともゝ煙塵ハ変ず人物ハ改まともゝ風流改らず抔駿の富士ハ三国の名山あれとも頂嶺ハ登る時ハ膝朧ふく雲を歩ハ入るゞ如し渺東北の方海陸のひくんあり

只旭の出る所ハ帝都の繁花琵琶湖乃八景みな目中の客となりく城江二州の絶勝とするべし艮嶽とてハ艮ハ根ハふく堅しゝ卦の名ゝ丑寅の方則一陽来復の後丑ハ繋寅を演く東方孟陬ハ辰あり故ハ王城の鬼門を護て悪魔ハ祓ふとぞ

渭之世俗鬼門柱と云ふ比叡嶽をいふ也

成光山西教寺

坂本大宮にあり天台律宗の本寺

念佛三昧通證

本尊阿弥陀佛

丈六毘首羯磨作開基元三慈恵大師

中興真盛上人諡号圓戒國師と云ふ

下坂本比叡村にあり天台律宗の本寺

念佛三昧通證

紫雲山来迎寺

本尊弥陀釋迦薬師三尊

開基恵心僧都の像を安ず

苗秧明神

苗秧村にあり延喜式三郡波加の神社

例祭四月中酉日仏地の生土社

祭神天太玉命

仏神老翁と化して七年に造立苗秧の神主に託宣の事當記にあり

天智天皇

堅田浦

志賀郡にあり大津より三里

領主堀田摂津守

後渡捨

ふりつもるあをなうれのうへにうき

新十

雪のうちの浦われもとるめしもこゝに立ぬる小

新拾

わたつうみの浦の沖波立名ゆりや安からん

通暁法師

新続古

さゞ波やうみもそこなく成ぬるわが身の

後拾

後ふみうたれなやたゝん堅田の浦のあま小屋

宗成

新十

いつしかとも思ひこゝろ翻はさゝ舟の

むかふ渡海の名所小錦織添大納言

てゝ付家来小錦織添大納言と云ふ者

至つて若き者ありて常に管絃を翫ぶ

ありしとかや

堅田落鴈

近江八景之詩者

相國寺林長老

哥者

近衛関白時熙公

鴻一鴈幾ク行リ更ニ不レ孤　暁風帯レ月落ツ東湖ニ

聲一聲沙背一水堅田ノ浦　明八一陣ノ圖

浮御堂

志賀郡堅田小野宗旨禅宗

永祚寺聖大徳寺に属ス

本尊阿弥陀佛

左右小化佛一千躰と安次

観音堂

聖徳太子御作の観音安次

弘法大師の御作

倶舎恵心僧都の作

僧都の閻魔王薬師佛

僧都の開基薬草の草堂

満寺初

一條院御宇楞厳の源信僧

都を傍小云むし源信僧都楞厳

光明赫々たり仏浦小来り漁者の

網と浮ふ仏浦古来より漁人多し

腰際小篭ル

本尊弥一丈の躰を安ず

櫻町院記を下しく御再興に及ぶ又其跡ありく

二日のる法会あり

近郷群集に

勾當内侍古蹟

今堅田の田地中ゟ堀あり毎年九月八日夜ゟ入来ル

二日のる法会あり

近郷群集に

仏内侍ゟ頭ノ太夫行房の始ありく

今に名る半ばし

今堅田の田地中ゟ堀あり毎年九月八日夜ゟ入来ル

二日のる法会あり

近郷群集に

仏内侍ゟ頭ノ太夫行房の始ありく

今に名る半ばし

左中将義貞に忘れ形見の妾の中に
わが袖のなみだにやどる影とだにしらで雲井の月やすむらん　勾当内侍
ここに於てつかへしそれを君きこしめして義貞にたまはりける
ゐぶかしくしばしのさんごの樹に陽之の鬘かぐさる連理の枝のかはらぬ
睦をなし花の瀬々左中将坂本より北国へ落たまひし時
内侍をば今堅田といふ所にとゞめ置かれたる其後義貞越前にて討死
の事をきゝて悲しみのあまり心も消えて中々
泪も流れずそれより都へのぼり髪をおろし墨染のそでとなりて
嵯峨の往生院に入かくれたまひける
られし事太平記にみえたり

大伴櫻（おほともさくら）

堅田より西の方五六町山際田圃の中に塚あり其上に桜あり
大伴黒主の古跡そのみづから植置しとぞ桜なるべし

真野入江（まののいりえ）

堅田の北にあり真野村真野川あり
浦浜みな古歌多し

金葉
鶉なく真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕ぐれ　源俊頼朝臣

続後撰
吹おろす比良の嵐や寒からんまのゝ浦人衣うつなり　後鳥羽院下野

続古
夜半に吹浜風さむしまのゝ浦入江のちどり今ぞなくなる　真昭法師

新後撰
真野の浦よ舟こぎ出て入江の波に月をこそみけれ　法眼源承

続千
冬されのを花も今はふる雪に入江もこほる真野の浦風　藤原宗行

新拾遺
乱れ芦のほむけの風のかたよりに秋をぞよする真野の浦浪　後京極摂政

比良（ひら）

大津より六里斗北比良南比良の二村あり北比良川あり初冬のころより暮雪
すでに高嶺に積えて京師より見ゆる古歌多し比良神社と
いふハ白鬚明神を
まつるなるべし

新続古
あふみぢや真野の浜べに駒とめて比良の高根の花をみるかな　頼政

千載
桜咲比良の山風吹まゝに花になりゆく志賀の浦浪　左近中将良経

同
さゞ波や比良の高ねの山嵐紅葉を海のものとなしつる　刑部卿範兼

新古
花さそふ比良の山風吹にけりこぎゆく舟の跡みゆるまで　宮内卿

同
さゞなみや志賀の浦風さえて比良の高ねに霰ふるなり　法性寺入道前太政大臣

続古
雲さそふ比良の山風月さえて氷りかさぬる真野の浦波　経信

新拾
夜ふけて山風さえてさゞ波のひらの湊に千鳥鳴也　宗尊親王

新後拾
氷ふく山水にむすぼゝれ比良の高根は雪深になり　後京極摂政良経

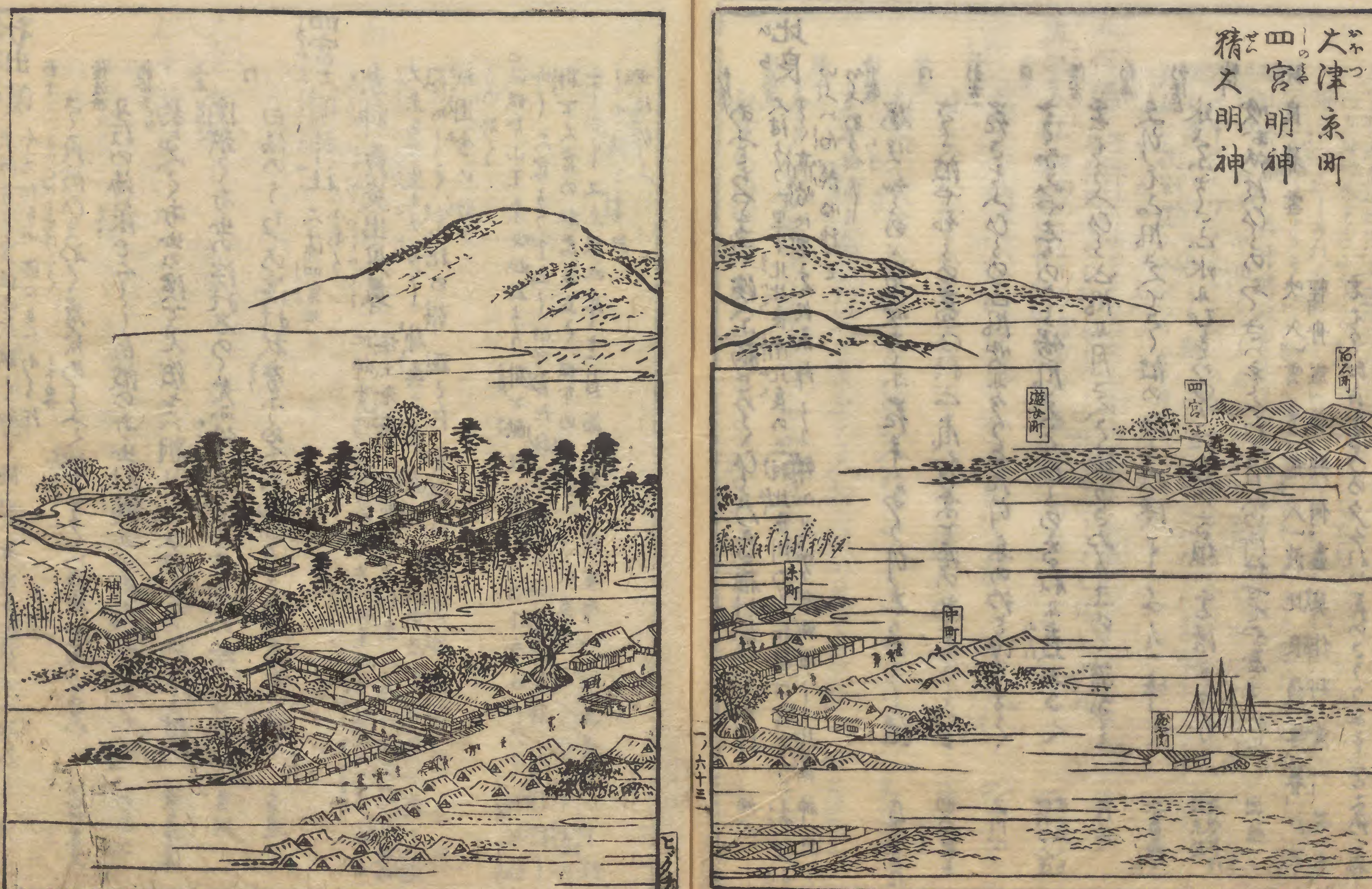
堀川
吹おろす比良のみきハをこえて日次の御贄せぞやまし　国信

比良暮雪

吹入雲兮飛入波　比良嶺雪暮汀寒　軽舟短棹興何尽　莫作剡渓一様看

雪ふる比良の高ねの夕ぐれハ花のさかりにすぐる春かの

大(おほ)津(つ)京町
四(しの)宮(みや)明神
猪(せ)太明神



打出濱

京師より逢坂山に越て初て湖水へ打出る濱にいふ物なし

彩千 今の松本の渡口にあるに 千石國打出濱にて 上下略

さて難波ひまわく岸にあらふ浪さよくはきそもみよとや　大伴黒主

續後拾 みほの海に氷とくらし白波の打出の濱に春風をふく　源兼氏

新拾遺 豹なくて打出の濱を見渡をは朝日にさらく志かのうら波　後鳥羽院

文本 関越て打出の濱の志のゝ先に詞よりと人間鳥の都ゝ分　落相

門 白浪のうちての濱の秋旁に多くは物おりに鳴鳥を帰　寺達

四宮大明神社

大津四宮町にあり

祭神

地神第四ノ宮なりしに左は地主神大国主命右は塩土老翁三座に祀る例祭九月十日大津濱辺の大祭なり生土子多し神輿二基牽山十四人形及び錦繡を飾り遣花にして祭祀の時猿とは見観壮麗遠近群集次京師紙園舎の時さ

りの形り

○又坂本山王祭に此社より榊を献ぜ毎年三月下旬山に入て榊に伐出し大宮より下山し此四宮に移し申ノ日神主代衣冠にて祈願し榊を大宮の社前に立て坂本の宮仕へ以て舊例にて累年怠惰半かし又元祿九年十一月當社司大伴重堅古語拾遺に卞板して跋を書に世に伝へ

精大明神社

大津松本にあり初メは花洛桂宮 拾芥抄云桂宮ハ大条ノ北西洞院ノ西門前有桂木故為名 にあり 承元年中詔によりて此地に遷に

祭神

猿田彦命 相殿仁徳天皇

○社傳云當社精大明神は踏鞠の祖神にして後鳥羽上皇此道に御心にせられ厚く当信しかへ

それより世々踏鞠の家怠らに恭敬浅からぬ故に境内廣くして社頭巍々たり旧地を元宮と呼んで松柏繁茂して古跡となり此地平平坐といふ旧号あれど相殿に大鷦鷯天皇と勧請に末社平天満宮鎮火神愛宕恒世ノ神これは池田家の祖神にして山王へ神供に給ふ旧記日吉にあり故に山王祭に神主代として児出に松本馬場村の生土神にて例祭四月朔日也

菊ケ濱

松本村にいふ石山寺記云むかし宇多天皇石山寺に御幸の時淡海の國司大伴の翁といふ人此濱に御宮に建て種々の菊花を植て御幸を響意なる故に菊の濱の名あり此大伴ノ翁に黒主ゆへ新千載のさくら波の和奇をあるよし此記せり殆信用し難し和奇は打出ノ濱の下に出せり又此所を玉造といふ旧号ありむかし大内裏造営の原を貢ありしとぞ今に瓦師かゝあり

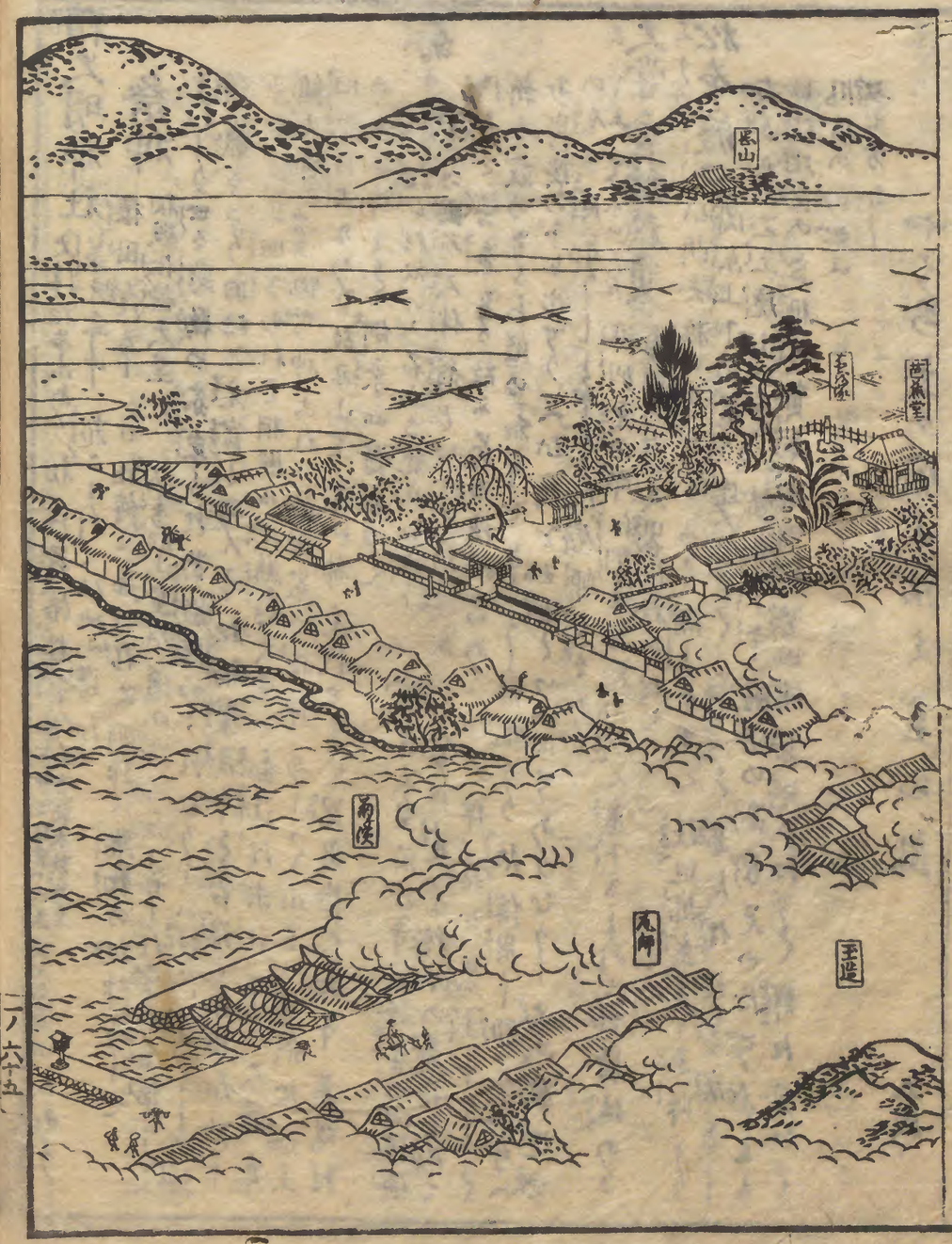
大嘗會稲穂貢

丹州奈田郡江州志賀郡旧例之亀下によりて丹江の遠あり當國の時は大略此松本村之

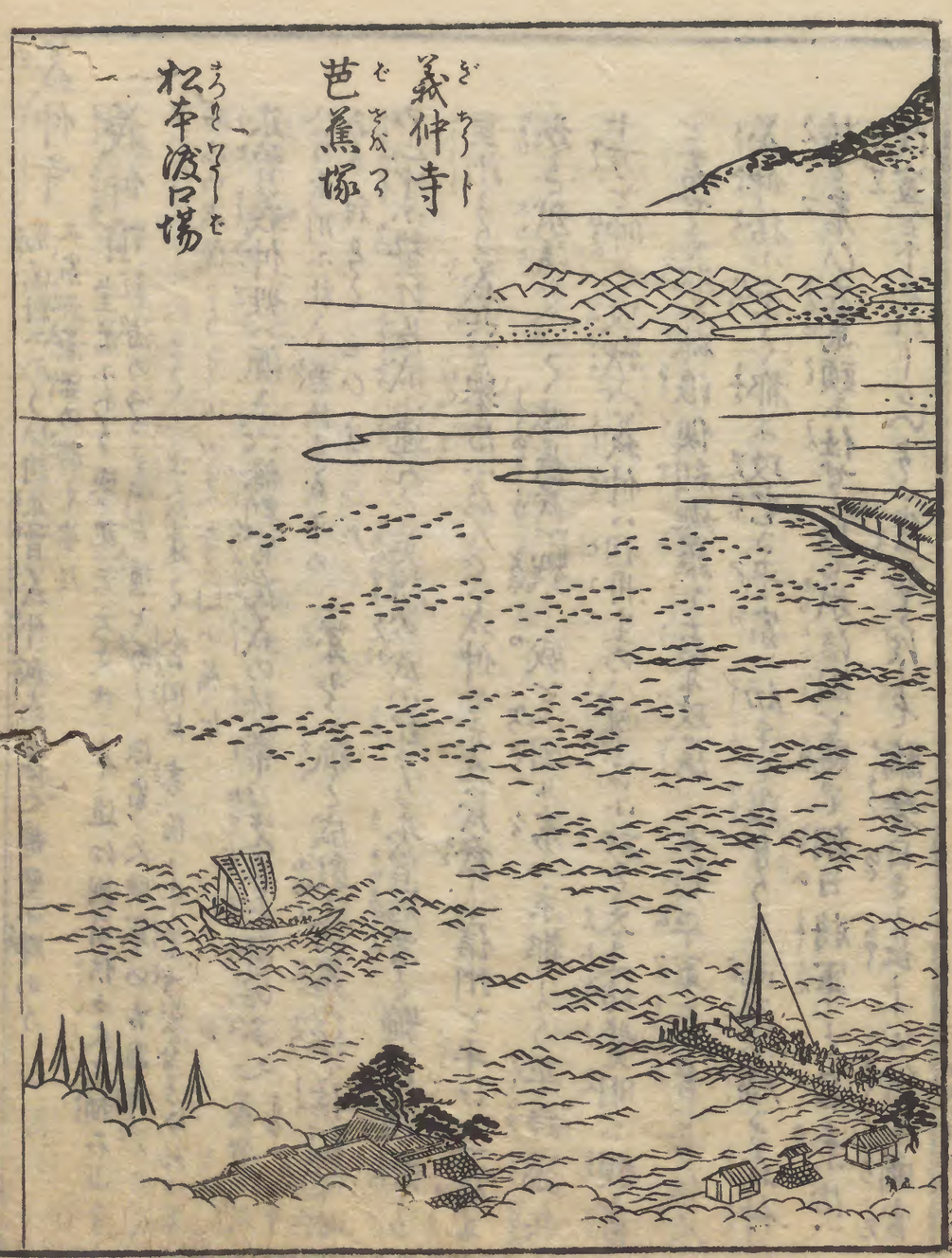
松本渡口

此所矢橋の舟ゆへ湖上を里へ濱辺風景よく京師より関東上下の送り迎ひ多く宴に僕に茶店多し右手には三上境山あり八幡長命寺瞻映の高数見由ゆ弓手にて日枝比良の高根志賀唐崎の松堅田浦真野入江まで鮮に見へて風流の猿地又双ぶ方なし

やそ歩奈る嫁よ始を其の風　太祇



黒山
芭蕉堂



義仲寺
芭蕉塚
松本波口場

義仲寺 馬場村にあり此所は曾義仲戦死の地と佛堂に牌あり又家臣兼平の牌も安に

義仲墳 堂前にあり或ハ記云天文廿二年近江國司佐々木高頼石山寺統諸の御ゆるさ此古墳を築し源家ノ大將軍の古跡守戸かくてはあるべからずとて一宇を建て含田を寄附し堂ぢを付らる初メは石山の末院なりしが今は寺門に属に

木曾義仲姓は源氏六條判官爲義の孫帯刀先生義賢の子之 義賢は久寿二年八月武州に於て悪源太義平の二茅にて孤と成乳夫の家に依て信州岐岨の山中に蟄に長成に逮んで英雄の武に起り木曾冠者と號ひ頼朝は豆州より義兵を擧げに及んで義仲も亦兵を發し信州を平げ上野に越さ越後に入ッて城長茂を戮し威を小國に震ひ京都より平經盛兵十万を帥て攻戦ハ義仲は羽丹生の八幡宮に於て太夫坊覺明に願書を書せて収め砥浪倶利迦羅を急に攻落しければ平軍死る者七万餘人義仲猶に急て都に攻寄る平家は幼主を護ありて西海に趨る義仲権を震ひ左馬頭に任ぜられて越後國を賜て朝日將軍と名乗は院宣を下されしかはさ貴ならずして驕奢日々に長じ公卿が闕官

し土民を流毒し上皇を逐内裏を焚暴逆多かりしかぞ鎌倉より範頼義經討ちとして差寄せられ宇治勢多をさへて戦ひしが義仲乃軍敗し勢田を堅し兼平に打出演そりあひ殘兵を聚て又戦ひしが遂に主從二騎に討なされ粟津原の源田に馬を乗入猶豫とこ所に石田小太郎爲人が矢に中て戦死しなる事は平家物語に見へたり

○芭蕉翁墳 義仲寺境内義仲塚に隣る又茅室にそれが翁の本像を安置天下蕉門俳諧の祖たり

枯尾花出辞世 旅に病ぞ夢は枯野を かけ廻る

それが

此翁終焉の事は枯尾花の序に委し是其角が擬之其大意は一茅蕉翁西國に脚に疲れんとして大坂に下り舟場御堂前花屋が家に旅寝して病を病て終に去て終に元祿七年甲戌十月十二日年五十一門人其角丈州正秀去來を初メ十案斗發波より携て去て遺詞を兼ての遺詞に

○近年寛暦十年の比京師下岡崎五升唐燦爰四方の俳士に觸て此茅室に創し堂内に蕉翁の門下三十六人の秀句を聚めて其門弟子の血脈の案孫弟の胤をたづるにこれに書しめ四方にかくは

○什寛に蕉翁の桂の杖茅の跡をたづるにあり これが盛むる事は東洋文庫といふ近年此真蹟無市板しまく世にもしへ

義仲寺に翁が葬りて

なれかたの笠にかくす 枯尾花 其角

志賀のお湖のかっの

○芭蕉堂の澤ゐ無名庵とて人のうる事多し寛保の比尾州雲裡房石山の奥國分の幻住庵の古跡ゐあり椎の木をも植ふくれり

○金神さの二町許南小圓山とて人のあり蕉翁の上足丈艸ちに庐ゐ結んく仙幻庵と号し風流に地名ゐ龍圀と改び丈艸ゐ原尾州太乙の家ゐ出家し禅宗と成りの比雅ゐ尊く詩を善し俳諧ゐ正風の達ゐあらに絶をとる

大系や燵の出く多人勝月　丈艸

素堂

永平と微のふげし根芹汁　今

脇所　城のう本田房領ぢう信也門ちう五ヶ庄のう城下の町猥てたに町くの西の口船町をうく宮ノお町の右ゐ八大龍王のゐつろあう八の宮とい人家ゐ五月六日ゑ左ゐ泉水ちあう風系の祇ゐ建ふくれ八大龍神の社あう中大ふ水脇所ゐ社のうたの方尾乃湧た湯炎のほ水吉孫君とある田畑の祠あう中ノ庄ふ料頭天王橋岩祠あう宮町ゐ若宮八幡宮新羅明神の社あう又那保の村中ゐ蕉翁の棲のひし國分の住庵ゐ曲翠とて古流又茶作堂あう門ちうし古流又茶作堂あう圀分寺とて

脇所ゐ原栗津ゐ陪脇演あるべし山王系ふ神供ゐ献ぢ由緒ゐあり

例系の若七日の向ふ所の頭人の家ふ筱の紋ゐ幕を張ひうくの者人あるひい

湖水交易の船着みかう仁征して其ゐゐ應し寶殊をとう神供料とて当年ゐ十分一とり仁起を原ふむう山湖ゐ二人乃総甲あり名代迎江栗津佐森陽畑とて今ゐ人ゐ日吉迎江佐栗津恒世とくあり鎌倉頼朝卿の台令ちして迎江國二十四左所ゐ内のあ人の支配そ九十九浦の初穂十分一ゐ迎江佐栗津恒世ゐ支配とう

栗津恒世ゐ支配とう大津八ノ柳とく神供ゐ献ぢ由緒ゐあり又松平若狭明神の末社ふ恒世の祠あり又脇所ふ陽炎の陰水あり仁所に居住せう第平の福助ゐ繋ばの象や

（挿ゐ日吉の社祇ふ恒世が

ひうくの石山寺とく佐もうちの申の条日ゐ人縛船二艘ふ横仁らひ栗飯の神供を餝ゐ船中ゐ笑ふくく夜の初より湖上を漕出し若楽仁奏ふくく城ゐ西仁被ゐ毛夜を着ゐ

七人のり芸れよう磯づたひふ大ほ漕引領主よりふ警固和も倶ふ漕連陰地往来の者人ゐ旅人ゐどふ笠を被かうまれを観ゐ盧銃をおて知仁衛午の刻ふ庵陽ふ到ゐ神ふ詣ふく神供とまりまれを脇所の神供とう

国立公文書館
National Archives of Japan

木曽四天王
随一之軍将
今井四郎兼平
粟津原血戦

春泉齋

賠膳濱 繁ばの際をいへるにや 袖を
とくもとほるばもわ〳〵かあくをみるおりのく涙の催す日つきへ 第盛

栗津野 又栗は小松又栗はなの赤の古事多し大はねなどうち 勞田稿
その熱原之今も街道をいへるにや 注拾 栗はのくをくその落つのくへ 稿修正拝四
いそくへ夜よめれく 第千 作家
あそ川 なの葛なをそのゆるすやそ川へ 第陸吉 左衛文武補
あく坂のもれ松をく成ふくうち 第拾 政治法作
栗津杜 栗はの落水いと 第玉 第四 註擬 勝部 以下
栗津里 なれも城下ふるくさまへ 第勤 猿子内親王家歌侍
東海のなちれまその森志ける上里 第伍
南のあ〳〵表をふ次やそ波のあそ川の里ふ衣うへ 後拾九 基氏

兼平憤 栗は松原より西ふへ入津三町 高四尺許 今井四郎兼平と 縋ん 田圃の中ふ石塔あり

東鑑曰
青永三年正月廿日 蒲冠者範頼源九郎義経
等為武衛御使上洛是追罰義仲
也今日範頼自二生数萬騎一入
洛義経入二自宇治路一木
曽以三日先生義廣今井四郎兼平已下軍士
等於彼両道一雖防戦皆以敗北蒲冠者源九郎
相具河越太郎重頼同小太郎重房佐々木四
郎高綱畠山次郎重忠澁谷庄司重國梶原源
太景季等馳参六條殿奉警衛仙洞此間
次郎忠頼已下勇士競走干諸方遂於近江國
粟津邊令相撲國住人石田次郎為
平其外錦織判官等者逐電云云

今井四郎兼平 嫌中原信州の産 兼遠ぐる〳〵義仲信州小流落の時兼遠
極青にて忠肝義膽を專とく義仲遠勅ふより
〳〵く勇威を著〳〵義仲遠勅ふより
〳〵く範頼義経追討の院宣を蒙て東軍
洛ふ入く攻戦ふ宗ふ義仲の陣敗亡ぬ勞田の稽を固〳〵兼平ふ先生を和らんぐ為
あとに落る兼平も赤味方の存亡を守んとく勞田ふ来ると雖も主君ふ遇へ
且喜び且哭く散兵ふ紛屡戦へ半巌上の電の如〳〵敗走して義仲も

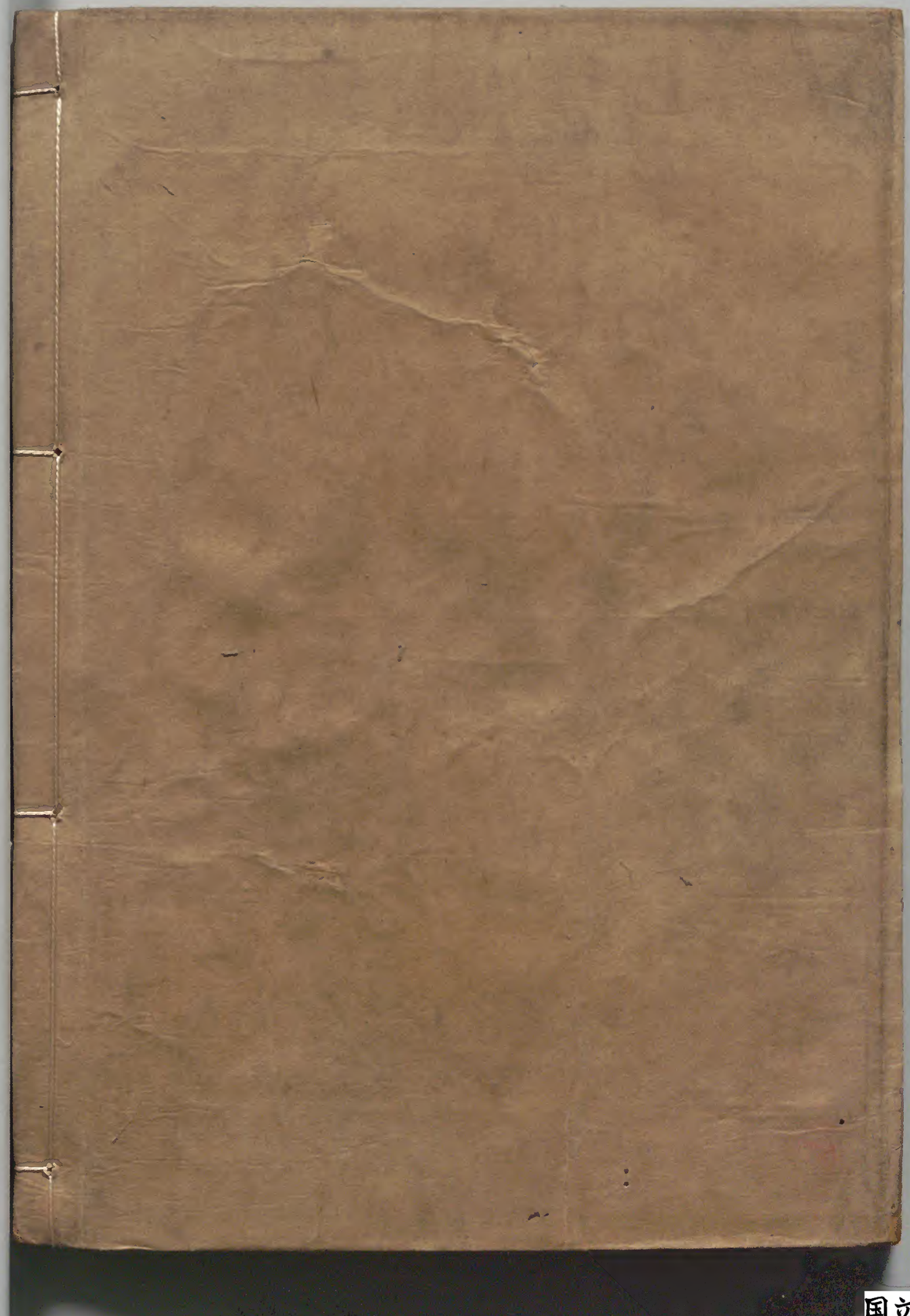
戦死しゐるを兼平も防戦の術盡く太刀の切先を口に含み馬より逆に墮ちて自戮は禮記に曰人の臣としては其身を殺して忠を成家次左傳にも忠を人の望んとぞ宋の文天祥は忠に死しく顔色変せば韓成は身を殺して忠を屬む遂に祠を康山に建るあるにも其忠死を賞じて祠廟を建て後世英名を賞せざる事豈遺恨ならずや

日本政府圖書

日本政府圖書

東海道名所圖會卷之一 畢

二ノ七十一終


国立公文書館
National Archives of Japan